

〈少佐夫人の物語〉の二つの草稿

——ムージルの〈遙かな愛〉を理解するための基礎作業として

白坂 彩乃
大川 勇

一 失われた草稿

ムージルの『特性のない男』第一巻（一九三〇年）第三二章で語られる〈少佐夫人の物語〉には、その前段階に当たる二つの草稿がある。⁽¹⁾ „stille“ と呼ぶ草稿がそれで、⁽²⁾ „stille“ が一九二三年、⁽³⁾ „stille“ が一九二五年の成立と見なされている。私たちがこの二つの草稿の存在を意識したのは、エンニャ・ウィルキンズの論文「ムージルの〈少佐夫人恋愛事件〉——未発表のテキストとともに」（一九六八）を翻訳したときだった。⁽⁴⁾

作品の主人公ウルリッヒが若き日の恋を想起する〈少佐夫人の物語〉は、理性と神秘主義の両極性をもつウルリッヒの神秘主義的極性を決定づけた「恋愛事件」（E・ウィルキンズ）であると同時に、『特性のない男』という長大かつ複雑な小説の「不可視の中心」というべき「深層の物語」⁽³⁾でもあるのだが、にもかかわらずこの「物語」は「反復と矛盾とで成り立っている」⁽⁴⁾とウィルキンズは言う。あるいはまた、アガーテ登場後の第二巻で〈少佐夫人の物語〉はしばし

は引き合いに出されるが、しかしそこで語られる内容について「小説中に詳しいことは語られていない」⁽⁵⁾、とも言われる。たとえば、第二巻の遺稿部第九章「夜の会話」でウルリッヒはアガーテに「〈少佐夫人の物語〉を君に話したことはあったかな? (……) あんなふうにならなくてしまつてはならないのだ」(Mappe III/7122)と言うが、ウルリッヒはそれまでアガーテに〈少佐夫人の物語〉を詳しく語ったことはなかった。ウィルキンズによれば、

ウルリッヒとアガーテの会話のなかではそれ以前に一度だけ少佐夫人のことがほめかされているが、それは第二巻第二章で偶発的に生じたものだ。そこでウルリッヒは「陶醉状態にある者たち」の悲哀について語る。それは「恩寵の状態から転落し、筆舌に尽くしがたい不快感を覚える」というものだ。アガーテは「突然」、ウルリッヒが「そんなに愛した」のはいつのことかと尋ねる。彼の答えは、「だれか一人の女性を愛するのではない愛」しか経験したくないという思いから出たものだった。その愛とは、後の第二章で「山岳地帯での晩秋の日々」を彼に思い出させ、自分が「あらゆる欲望から遠く離れ、もしかすると愛の近くにいたのかもしれない」と感じさせたものである。そして第二第三章では、「初秋の日と同じくらいに肉体的でない、静止した、空気のように静かな、遙かな愛 (Fernliebe)」と呼ばれている。⁽⁶⁾

だからアガーテが〈少佐夫人の物語〉のことを知らなくても当然なのだが、ではウルリッヒがここでアガーテに語る物語を読者が知っているかという点、そういうわけでもない。『特性のない男』第一巻第三二章で語られる〈少佐夫人の物語〉には、「陶醉状態にある者たち」の悲哀についても、彼らが「恩寵の状態から転落し、筆舌に尽くしがたい不快感を覚える」ことについても述べられていないし、そのときの体験が「山岳地帯での晩秋の日々」を思い出させるこ

ともない。それどころか、少佐夫人のもとを逃れてウルリッヒが向かったのは「山岳地帯」ではなく、海に囲まれた「島」だったであり、そのときの季節について述べられることもなかったのである。ウィルキンズが言うように、そのような物語は「出版されたテキストのどこにも見当たらない」⁽⁷⁾のだ。

いったいなぜそういう「矛盾」が起こるのか——その謎を解き明かす鍵としてウィルキンズが取り上げるのが、彼女がその論文「ムージルの〈少佐夫人恋愛事件〉」ではじめて紹介したムージルの「未発表のテキスト」⁽⁸⁾“Unpublished”である。

少佐夫人恋愛事件の謎にたいする答えは、主として一九二五年某日から一九二八年十月のあいだに書かれた三つの手稿にある。うち二つは恋愛事件のヴァリアントを含んでいる。この二つのうち、より早くに書かれた方は小説の成立史における「双子の妹 (Zwillingsschwester)」の段階のものであり、*Sister* という記号がついている。つまり、これは（断片的な）*S (=Sister)* 草稿の三つ目の部分に含まれており、一連の章のなかでの位置はまだ決まっていない。そこで主人公アンダースは、一人で子どもじみた熱狂とエクスタシーについて思い出しながら、ほぼ正確に『特性のない男』第一卷第三章と同じ言葉述べていた。その後に書かれたもうひとつの手稿は、この稿に直接依拠しているか、あるいは（現存しない）中間稿 *Step 9*——二重になった二枚の紙の二枚目にこの記号が付されている——に依拠しているが、このテキスト全体は*S*手稿以後の方法によって分類され、*9*として（カバーでは10に修正されたが、見出しでは修正されていない）第二卷第三章群に含まれている。どちらの分類でも、プロットの第三段階は『特性のない男』第二卷第一三章以降と対応している。*9.A.A.9*というこの草稿は、あの物語を完成稿とは異なった文脈に置き、そしてそこに別の重要な事柄を付け加えている。⁽⁸⁾

このようにウイルキンズは、先に述べた矛盾と謎は、『特性のない男』に草稿段階で書き記された内容を暗黙裏に挿入していることに起因しており、だからその草稿に記されたことを把握していなければ『特性のない男』は理解できないというのである。それについては後述するとして、そのまゝに確認しておかなければならないのは、ウイルキンズのいう「三つの手稿」の存在である。というのも、ウイルキンズはここで三つの草稿の存在なし非存在と、この三つの草稿間の関係について、かなり理解に苦しむ説明をしているからである。

ウイルキンズによつて „St+I“ „St+9“ „A-Ag.“ と呼ばれた「三つの手稿」のうち、 „St+I“ の存在は容易に確認できる。この草稿は一九七八年のフリゼー版全集^⑤ (Gesammelte Werke) にも現在刊行中のファンタ版全集^① (Gesamtausgabe) にも採録されており、ほぼ確定できるテキストとして読むことができる。ところが „A-Ag.“ は、ウイルキンズが出典を明記せずに引用していることもあつて、その存在すら確認できない。この草稿をウイルキンズが „A-Ag.“ と呼ぶのは、そこでウルリッヒの前身であるアンダース (A) がアガーテ (Ag) に過去の恋愛体験について語つており、それがアンダースとアガーテをめぐるテキスト („A-Ag.“) で、第二巻第三章群の九章として組み込まれるはずだったと彼女が考えたからであろう。だが、この „A-Ag.“ は、なぜかフリゼー版全集にもファンタ版全集にも採録されておらず、そのため本当にそのような構想のもとに書かれたものであるかどうか、客観的に判断することができない。踏み込んだ言い方をすれば、ウイルキンズの „A-Ag.“ は彼女がその存在を主張しているだけで、他の誰も見たことのない「幻の草稿」かもしれないのである。さらにくわえて、 „A-Ag.“ の成立をめぐるウイルキンズの説明は、それ自体がひとつの謎を生み出す。 „St+I“ が書かれたことを受けて、「その後に書かれたもうひとつの手稿」としての „A-Ag.“ は、その „St+I“ に「直接依拠しているか、あるいは（現存しない）中間稿 St+9 (……) に依拠している」と言われるのだが、ウイルキンズはいかにして „A-Ag.“ が „St+9“ に依拠している事実について語ることができたのだ

ろうか。^{st+9}が「現存しない」草稿であるなら、それを読むことも当然できないはずで、ならば依拠云々について判断することはできないであろうし、ましてそれが^{st+1}と^{9-A-Ag}の「中間稿」であると推論することもできないであろう。にもかかわらず、ウィルキンズはこのいわば「非在のテキスト」の存在を前提に^{9-A-Ag}の成立について語っている。二つの「失われた草稿」——ひとつはその存在を客観的に確認できず、もうひとつはそもそも現存していない——を前にして、私たちはただ途方に暮れるしかなかった。

二 見いだされた草稿

ひとしきり途方に暮れた後で、私たちはもう一度ウィルキンズの記述を読み直すことから始めた。すると、ウィルキンズの言っていることはやはりわからないものの、そこに謎を解く手がかりとなるかもしれない物質性をおびた言葉が記されていることに気づいた——「二重になった二枚の紙の二枚目にこの記号が付されている (the second of the two double sheets bears this cipher)」。^{st+9}の「この記号」とはもちろん^{st+9}のことであるが、「二重になった二枚の紙」とは何か。もしそれが「その後に書かれたもうひとつの手稿」のことであれば、^{9-A-Ag}はたしかに「紙」＝「手稿」として存在していることになるが、私たちには当初そのことすらよくわかっていなかった。

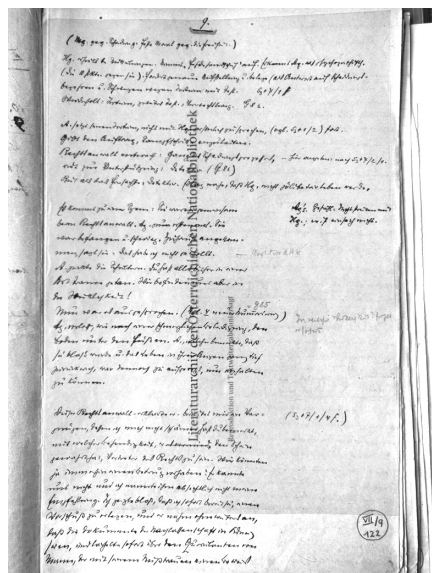
それでもウィルキンズが論文の別の箇所では^{9-A-Ag}は^{st+1-16}とともに「第二巻」と記されたファイルにあると言っていることに促され、まずは「楽園への旅 (Reise ins Paradies)」という名で知られる^{st+1-16}草稿を収めたファイルを探し出すことにした。ウィルキンズの言っていることが正しければ、そのファイルが見つければそこに^{9-A-Ag}もあるはずである。この探索は比較的容易だった。H・アルンツェンが『ムージル・コメンタール』(一九八二)で遺稿

ファイルの整理と簡単な内容の紹介をしてくれたおかげで、^{9. s.t. 1-16}草稿が「Mappe 7/9」と呼ばれるファイルに収められていることがわかった。⁽¹³⁾ すぐにムージルの遺稿を管理しているオーストリア国立図書館に、「Mappe 7/9」に^{9. A. Ag.}という名の草稿があるかどうかを照会し、あればその写真がほしいと依頼した。

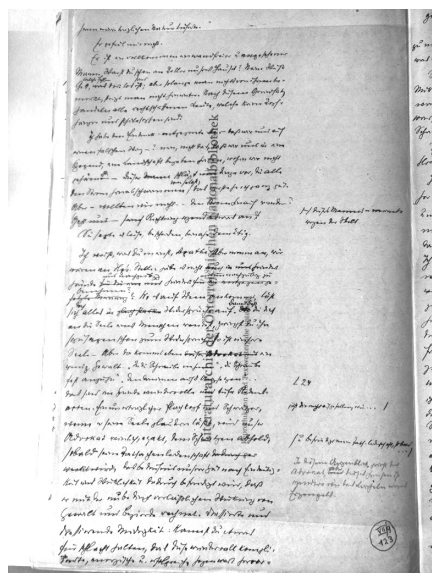
その返事を待つ一方で、私たちはムージルの遺稿研究にも目を向けた。この道の第一人者といつていいW・ファンタの『ローベルト・ムージルの『特性のない男』成立史』（二〇〇〇）を繙くと、驚くべきことにそこには〈少佐夫人の物語〉の草稿として^{9. A. Ag.}とよく似たテキストが取り上げられている。⁽¹⁴⁾ ただし^{9. s.t. 9}とこう名づ。^{9. s.t. 9}とえば、ウィルキンズが^{9. s.t. 1-1}と^{9. A. Ag.}の「中間稿」と見なしていた「現存しない」草稿のはずである。それが現存し、しかも^{9. A. Ag.}とその内容が酷似しているとはどういうことか。驚いた私たちは著者であるファンタに問い合わせのメールを出した。返ってきた返事は、ウィルキンズが^{9. A. Ag.}と呼んだ草稿は現在では^{9. s.t. 9}と呼ばれている、両者は同じ草稿だ、というものだった。

しかし、まだ問題は残る。ウィルキンズのいう^{9. A. Ag.}はファンタのいう^{9. s.t. 9}と酷似してはいるものの同一のテキストではない。使われている単語に若干の違いがある。⁽¹⁵⁾ その点を再度ファンタに問い合わせると、彼は私たちにクラーゲンフルト版の⁽¹⁶⁾トランスクリプションを送ってくれた。ムージルの草稿における削除や加筆をもれなく可視化したこのトランスクリプションを見ると、ウィルキンズが^{9. A. Ag.}として公表したテキストがファンタのいう^{9. s.t. 9}と同一のものであり、表面上の差異はムージルの削除ないし加筆した部分のどれをどこまで取り込むかという、ウィルキンズの裁量に由来するものであることが判明したのである。

くわえてファンタは、この^{9. s.t. 9}が遺稿ファイルのどこに存在するかも教えてくれた。アルンツェンの『ムージル・コメンタール』によつて^{9. A. Ag.}（=^{9. s.t. 9}）が「Mappe 7/9」に収められていることまではわかっていたが、このファ

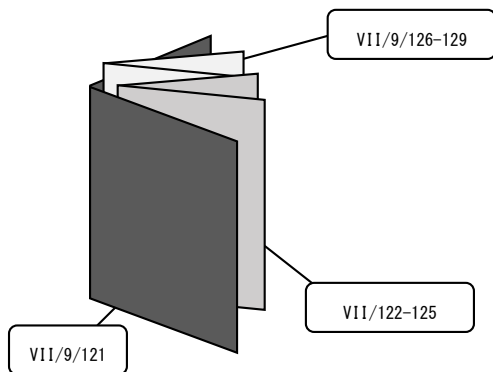


【図版 1 (VII/9/122)】

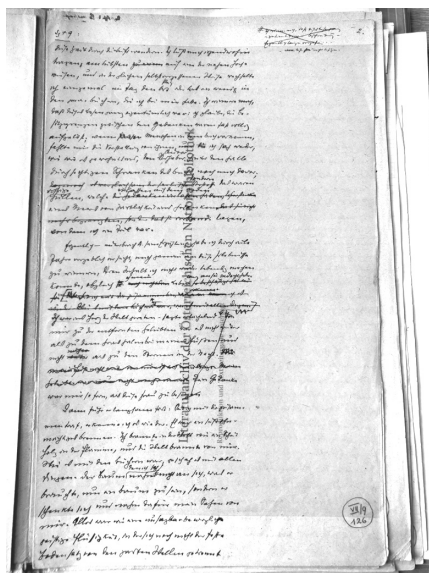


【図版 2 (VII/9/123)】

イルには一九〇ページ近くの草稿が含まれている。その中の一二二ページから一二九ページまでが「9」であることが知られた私たちは、急ぎオーストリア国立図書館に調査範囲の訂正を申し入れ、このページに限定した草稿写真の送付を依頼した。届いた草稿写真は、はたして私たちが探していた「9」や「A-Ag」と同じものだった。さらに副産物としての成果もあった。写真撮影された草稿を見ると、ウィルキンズが「二重になった二枚の紙（two double sheets）」と言っていた「9-A-Ag」の形態が手に取るように分かったのである。まず図版1を見てほしい。これは「Mappe VII/9/122」の写真で、ウィルキンズの言うとおり見出しに「9」という数字が書かれている。さらに写真の左端の方を見てみると、インクで書かれた「9」という数字が裏から見えている。そのファクシミリで確認した



〔図版 3〕



〔図版 4（VII/9/126）〕

ところ、この裏から見えているページは「Mappe VII/9/121」で、ウィルキンズの言う「カバー」にあたる。この図版を見るかぎり、「Mappe VII/9/121」はたしかに「Mappe VII/9/122」を包んでいるように見える。つづいて図版2に目を向けよう。これは「Mappe VII/9/123」の写真であり、その右端には「Mappe VII/9/124」がわずかに見えている。これらは別の紙に書かれたのではなく、あいだに紙の折り目があることから、一枚の紙を半分に折ってできた左の面に「Mappe VII/9/123」が、右の面に「Mappe VII/9/124」が書かれていることがわかる。さらにうつすらと裏面の文章が透けて見える

ことから、³Mappe VII/9/123⁴の裏面には³Mappe VII/9/122⁴が、³Mappe VII/9/124⁴の裏面には³Mappe VII/9/125⁴が書かれていると推測できる。つまり³Mappe VII/9/122-125⁴は、一枚の紙を二つに折って計四ページの冊子状にしたものである。残る³Mappe VII/9/126-129⁴も、オーストリア国立図書館からの写真を見ると、前半四ページと同じ構造をしていた。以上わかったことをもとに見取り図をつくってみると、こうなる（図版3）。

つまり、³the two double sheets⁴（=³Mappe VII/9/122-129⁴）を正確な日本語で訳しなせば「二つ折りにした二面付けの裏表の紙二枚」ということになる。そして、その二枚目の紙の冒頭には、たしかに³s+9⁴という記号が付されているのである（図版4）。ウィルキンズのいう謎めいた「現存しない」中間稿としての³s+9⁴は、おそらくはこの二枚目の紙に記された記号を、自分が目の当たりにしている草稿とは別の草稿を指し示す記号と誤解したウィルキンズによって捏造された「非在のテキスト」だったのであり、前節で述べた二つの「失われた草稿」とは、「幻の草稿」でも「現存しない」草稿でもなく、たしかに存在する一つの草稿³s+9⁴だったのである。

三 二つのテキスト——³s+H-1⁴／³s+9⁴／『特性のない男』第一卷第三二章（翻訳）

〈少佐夫人の物語〉の前段階をなす「三つの手稿」としてウィルキンズが想定したものが、実際は³s+H-1⁴と³s+9⁴という二つの草稿であることがわかり、ようやくこの二つの草稿と『特性のない男』第一卷第三二章との比較考察に入る準備が整った。だが、具体的な比較に入るまえに、まずはこの三つのテキストを提示しておこう。ウィルキンズは彼女の論文で³s+9⁴（=³9. A-Ag.⁴）と第三二章の比較考察をおこなったが、そのさい³s+H-1⁴については「そこで主人公アンダースは、一人で子どもじみた熱狂とエクスタシーについて思い出しながら、ほぼ正確に『特性のない男』

第一卷第三章と同じ言葉を述べていた」として、比較の対象から外していた。はたして本当にそうだったのか。以下に「三つのテキスト」を私たちの手になる翻訳で示し、その内容を確認しておこう。

st+n-1 [Mappe VII/8/38-41] (一九一三年)

青年は内心こうつぶやく——僕は愛しているのだ、生まれて初めて。彼はこう思っているが、ただ思っているだけではない。というのも、そう思っている彼には今もなおいささかの無邪気な尊大さがあるからだ。大人たちの世界を、この世界を丸ごと所有したいという無邪気な尊大さが。

彼はかつて女性を欲し、所有したことがあったかもしれない。恋に落ちることもあったかもしれない。さまざまやり方で——あるときは性急に、あるときは大胆に、あるいは皮肉っぽく、ときに燃えるように。にもかかわらず、「僕は愛しているのだ」と初めて思える瞬間がやってくることは依然としてありうるのだ。アンダースは当時ある女性と関係をもっていた。その女性のもとで、それは彼の身に起こったのだ——それはすぐに、ほとんど溶解といえるくらいにほどけてしまった。彼は次の日にはもう旅に出ていた。そして言った——僕らは互いにより手紙を書かないようにしよう。それから彼は宗教の啓示のような手紙を書いたが、それを送るのをためらった。新たな体験が彼のなかに力強く根を張っていくにつれ、彼はますますそのことを口外しなくなった。

彼は突然、このことをあざやかに思い出しはじめた。彼はそのときとても若く、士官で、田舎で休暇中だった。ひよつとするとそれが、そのとき彼の気分に変化をもたらしたのかもしれない。彼ははげしくある女性に言いよった。彼女は彼より年上で、彼の上司だった騎兵大尉の妻であり、かねてより彼に好意を示していたが、見るからに若い坊

やと恋の冒険をすることをためらっているように見えた。彼は普通ではない話、彼女の世界には存在しない哲学的で情熱的な話をして彼女を困惑させた。散歩の途中、彼は突然彼女の手を握ろうとした。運命の望むがまま、その女性は一瞬その手を彼の手に、氣を失ったようにゆだねた。次の瞬間、炎が腕から膝まで燃え上がり、二人を愛の稲妻が打ち倒したので、彼らはあやうく道の斜面に倒れこむところだった。そして斜面の苔のなかに座つて、彼らははげしく抱きあつた。

その夜は眠れなかった。アンダースは晩に別れの挨拶をしたとき、こう言つていた——明日、一緒に逃げよう。目覚めさせられたもののお満たされることのない情欲に襲われて、その女性は喉の渇きのように渇いた体をかかえてベッドのなかで身悶えしていた。しかし同時に、明日にはその渇きを潤すはずの奔流が洪水のように突然あふれ出るかと思うと、彼女は不安になつた。彼女は男の若さのために、そしてまた夫のために一晩中自分を責めた。彼女は善良な妻だったからだ。朝になつてアンダースから手紙が届けられ、彼女は涙に暮れながらも安堵の息をついた。その手紙で彼は、君への愛は変わらないと何度も誓いつつ、ひどく唐突な別れを告げていた。

ヴァレーリーは「心やさしい人」と呼ばれていた——アンダースは思い出した。経験が少ないにもかかわらず、当時すでに彼には明らかだったにちがいない。彼女はただのきつかけにすぎず、彼の突然の体験の中身ではないということ。が。というのも、情熱的な考えに揺さぶられていたあの眠れない夜、彼は彼女からますます遠くへ運び去られたからだ。朝が来るまえに、なぜなのかはつきりとはわからなかったが、彼の決心は固まつていた。こんな決心を彼はこれまでしたことがなかった。彼はリュックサックだけを持つてごく短い距離を鉄道でゆき、最初の一步がすでに新たな土地を踏みしめていることを感じながら、^{ひとけ}人氣のない谷を抜けて、山岳地帯にひっそりと存在するごく小さな巡礼地へ向かつて歩いていった。そこはこの時期には訪ねてくる人はおらず、ほとんどだれも住んでいなかった。

彼がそこでしたことは——これをだれかに説明しろといわれたら——純粹な無であらう。季節は秋で、山岳地帯の初秋の太陽は固有の力をもっている。朝には彼の体を起こし、見晴らしのよい高いところにある、とある木へと彼を連れていったのだ。というのも、彼は重い登山靴を履いているのに、自分が歩いているという意識が本当になかったから。このように我を忘れたまま彼は一日に何度か場所を変えて、持ってきた二、三冊の本をすこし読んだ。

自分の精神が普段よりも深いところで動いていると感じてはいたものの、彼は本当のところ考えてもいなかったのだ。というのも、普段やっているようにには思考が積み上げられなかったからだ。そうすると新しい考えが絶えず古い考えのピラミッドの上に降り積もり、その古い考えは最下層でますます固くなり、最後には肉や血、頭蓋、支えとなる筋肉の靱帯とひとつになる。彼は考えていたのではなく、着想がやってくるのだった——絶え間なくあふれ出て新たなものへと変化しながら、満杯の器へと噴水が広がり落ちるように。あるいは、着想は永遠に変化しつづける空の雲のように流れていったが、そのなかではなにも変化しないのだ。青い深海も、真珠の輝きをもつ魚が音もなく泳ぐさまも。一匹の獣が森のなかから出てきたが——アンダースは観察し、ゆるやかな動きでそこから飛びのいた——なにかが変化するということもなかった。一匹の雌牛が近くで草を食み、そこを人間が通り過ぎたが、それとともにただ脈が打つ以上のことは起こらなかった。静かに理解の壁を打つ、無限に続く生命の流れが生み出すほかのすべての脈動とまったく同じように——そんなことが起こりえたのだ。

アンダースは世界の心臓に入りこんでいた。彼から恋人までの距離は足元の草の茎までの距離とまったく同じであり、あるいは谷の向こう側の天まで届きそうな不毛の高地にそびえる遙かな木までの距離とまったく同じだった。奇妙な思考——空間、わずかにかじるもの、分離、遠く＝離れて (entfernt)、それは温かな皮を剥ぎとり死肉を残すが、ここ心臓のなかではそれらはもはや皮と死肉ではなく、心臓から足までの距離が胸までの距離より遠くはないように、

すべては心臓と結びついていたのだ。アンダースはもはや、自分がそのなかにいる風景が自分の外にあるとは思えなかった。かといって自分の内にあるのでもなかった。その境界は溶解してしまっていたか、また互いにすり抜けあっていた。そのような状態に身を置いているあいだ、自分になにかが——邪悪な獣、盗賊、荒くれ者が——襲いかかってくるかもしれないといった思いつきが実現することなどほとんどなかった。まるで自分自身の考えに恐れをなしているかのように、それはとても遠くにあったのだ。そして彼がこうしたことのすべてを体験するきっかけとなった恋人は、見知らぬ放浪者より近くはなかった。彼女は今なにをしているのだろうかと想像するために、彼の思考は目が緊張するように時として張りつめたが、彼はまたしてもそれをやめてしまった。というのも、日常の世界にいる彼女を想像することで彼女に近づこうとすると、見知らぬ世界をとおして見たときのようになってしまうからだ。その一方で、地下に隠れたまったく別様のありかたで彼は彼女と結びついていたのである。

s3+9 [Mappe VII/9/122-128]⁽⁷⁾ (一九二五年)

彼らは開け放した窓のそばに座っていた。正午の鐘が鳴るのが聞こえた。層をなす雲のように彼らは屋根の上空をただよい、自分たちはそのままに影だけを道路へと投げかけた。

町で鐘が鳴るのを初めて聞いたわ——アガーテは言い、やさしく微笑んだ。

聞いてくれ、アガーテ——アンダースが言った。話しながら彼ははじけるように立ち上がり気ぜわしくあちこち歩き回った。彼は彼女の手をとって、ふたたび彼女の横に腰を下ろした。——僕はまだ二十歳になっていなかったが、そのとき回心としか言いようのないことを体験したんだ。僕はそのときまだ士官で、たしかに神学者の能力はほとんど

備わっていないかった。僕はまだ一度も恋をしたことがなかったが、もはや心を拉し去るような情熱、すなわち「大いなる愛」を体験しないわけにはいかないと確信していた。そうならねばならないときには、自分に向けられた光線をスクリーンのようにはね返して、まるで自身から光線が発しているかのような女性がつねに見出されるのだ。彼女は僕より年上で、僕の所属する騎兵中隊の指揮官の妻だった。僕は休暇をとっていて、偶然が僕らを兵営の外の湯治場で引き合わせた。彼女は僕が好きだったが、ひげのない坊やと恋の冒険をすることはためらわれた。というのも、彼女はきちんとした女性で、あとで僕に言ったように、僕と関係をもつことは倒錯したことだと思われたからだ。でも僕は、普通ではない話、彼女の世界には存在しない哲学的で情熱的な話をして彼女を困惑させた。そしてそうせずにはいられなかったで、僕は散歩の途中彼女の手を握ろうとした。運命の望むがまま、彼女は一瞬その手を僕の手に、気を失ったようにゆだねた。次の瞬間、炎が腕から膝まで燃え上がり、僕たち二人を愛の稲妻が打ち倒したので、僕らはあやうく道の斜面に倒れこむところだった。斜面の芝のうえに座りなおして、僕らははげしく抱きあった。

僕たちは晩に別れた。夜は眠れなかった。心のなかで風が吹き荒れた夜、「途方もない」決心で頭がいっぱいだった。そして次の日の朝、僕は旅立った。僕は愛だけを連れて、その原因でありかつ対象であるものから逃げたのだ。すべては手紙に書くよ、という言葉だけをあとに残して。

彼女があとで話してくれたことだが、目覚めさせられたものの満たされることのない情欲に襲われて、僕の上司の妻は、喉の渇きのように渴いた体がかかえてベッドのなかで身悶えしていた。同時に、次の日にはダムを決壊させるはずの情熱の奔流が洪水のように突然あふれ出るかと思うと、彼女は不安になった。彼女は一晚中自分を責めたが、朝になつて僕からの急な別れの手紙が届けられ、涙に暮れながらも安堵の息をついた。僕はなにもかも置いてきたから休暇を適当な時期で切り上げるのも忘れていて、親切な彼女が僕のために夫にこっそり口添えしてくれていなかったなら、

あとになって逃亡の咎であやうく面倒なことになるところだった。

僕はこの夜彼女からますます遠くへ運び去られた。経験が少ないにもかかわらず、僕にはわかつていたのだ。彼女はただのきっかけにすぎず、僕の突然の体験の中身ではないということが。僕はごくわずかの荷物をもって短い距離を鉄道でゆき、一步一歩がすでに新たな土地を踏みしめていることを感じながら、山岳地帯の小さな寂れた巡礼地へ向かつて歩いていった。そこはこの季節には人気がなく、ほとんど人が住んでいなかった。

僕がそこでしたことは——これを誰かに説明しなければいけないとしたら——純粹な無であろう。季節は初秋か晩夏で、空には雲ひとつなく、大気には至福の苦惱、目を閉じてしまいたいようなあの穏やかな眠りの暖かさにすでに満ちた山岳地帯の太陽。僕は歩いていった記憶がない。朝には僕は宿の前に歩みでて、いま時分空中をただようたくさんのクモの糸 (Mariengarn) の一本になったように引き上げられた。僕はどこかへ——近くの高原の草地のひとつがいちばんよかった——運ばれるままになり、このように我を忘れたまま一日に何度か場所を変えたり、もってきた二、三冊の本をすこし読んだりした。僕はこの読書がかなり風変わりなものであったことを覚えている。本に書かれた考えがだれのものなのか、その境界はほぼ完全に解消していたと思う。人物が本のなかに現れてきても僕は彼らのことをイメージできなかったし、普段やっているように、本という半透明な壁の後ろにいる作者のことも本の前にいる自分のことも見えなかったのだ。それは錆びついた殻人間 (rostige Hüllen) で、やさしさと考えの海の底にぼつんといった。僕はその海の一部だった。

本当は——アンダースは話を中断した——僕は何年ものあいだこの体験を正確に思い出そうとしたけれど、無駄だった。その内容をふたたび蘇らせることはできなかったんだ、僕はそれからというものの、ずっとそのときのことを考えてきたのだが。僕は世界の心臓に入りこんでいたんだ——彼は微笑みながら言った。

そして、彼はゆつくりと続けた。君と出会ってからというもの、僕はそれがなんだったか再びわかりはじめている。それは甘やかに氣を失うような燃焼だった。僕は火にくべられた薪のように世界で燃え、世界は僕によって燃え上がった。本に起こったことがすべての事物に起こった。僕が見た木は、木であるために必要なものをそれ自体としてもっているわけではなく、みずからを与えそれと引き換えに視力を僕から受けとったんだ。すべては名状しがたいほど流動的な精神の液体のようであり、そのなかでは固い沈殿物はやさしい波からまだ分かれてはいなかった。力強い動きが絶えず新たに生まれでる円環となって広がったが、それが向かう先は定かではなかった。すべては惹起であつたが、確固たるものはなにもなかった。僕は知っていた、そのとき考えていたことは変わらず真(wahr)であるのではなく、すべては真実らしいもの(wahrscheinlich)にすぎないということを。そしてこれまでに獲得した知識はすべて死んだように消え去り、より高い感覚を与えられたように、いつもの厳密さは避けられる。それにもかかわらず、僕をいま恍惚とさせ、意志と途方もない意味とにあふれているものは次の瞬間には沈黙してしまい、ただ物言わぬ日常の相貌を呈するだけなのだ。

奇妙なものだ、まったく別の法則にしたがつたある生について、このように確信しているというのは！ この忘我状態にあつて、あのひとを所有するという考えほど遠くにある考えはなかった。それは吸いこんだ淨福な空氣を所有するというところくらいほとんどありえないことだった。もし僕があゝの瞬間に、彼女がだれかほかの男に身を捧げていると知ったならば、その男のふるまいはこの贈り物に値する器なのかと問うだけだっただろう。というのも、たとえなにが起こったとしても、それはすべて永遠に変化しつづける空の雲のように流れていったからだ、その変化のなかではなにも変化しないのだ。青い深海も、真珠の輝きをもつ魚が音もなく泳ぐさまも。

一匹の獣が森のなかから出てきたが、なにかが変化するということなく、ただ脈が打つ以上のこととは起こらなかつ

た。静かに胸壁を打つ、無限に続く生命の流れが生みだすほかのすべての脈動とまったく同じように——そんなことが起こりえたのだ。僕から遙かな恋人までの距離は足元の草の茎までの距離より遠くはなかったし、夜の星までの距離より近くもなかった。思うに、原罪はなかった。邪悪なことはそもそも考えられなかった。というのも、これは愛の世界であり、そのなかでは炎を燃やしているものしか見えなくなるからだ。

僕はその世界を知っているのだろうか、アガーテ、そしてそれを正確に書き記しただろうか？ 彼はやさしく尋ねた。彼らにつきそっていた鐘の音楽はとくに止んでいた。アガーテは彼の手を握って、話を続けるよう頼んだ。

それが終わったかって？ うん、ある日それはまさに過ぎ去ってしまったんだ。夜のうちに割れた鏡のように、朝起きたら破片となっていた。神に相對した天使たちの状態ってわけだ。天使たちには必要のないことだが、このような状態で人間にどうやってたとえば歯を磨け、あるいは財産を管理しろというのか？ もし僕が神を信じていたらひよつとすると聖人になったかもしれないが、しかしある日気がつくと、そこにあるのは鬱屈した、中身の無い、息の詰まるような物思ひだけだった。僕はそれ以来、神は世界を動かすために悪事、貧困、暴力、利己心、卑劣、金を必要としているのだと確信している。僕はふたたび世間に、つまり僕の連隊に戻った。あのひとと再会したとき僕の心は冷たくなり、数週間後彼女をきわめて卑俗なやり方で僕の恋人にした。

アガーテは身震いした。

僕はあの日、魂を失ってしまったのだと知っている——アンダースは真剣にそう言った。その後僕に起こったことは、なんであれ僕とは関係なく傍らを通り過ぎていった。ただ表面を通り過ぎるだけなのだ。僕は幸福ではなく、ある目的にたどりつく可能性を見出すこともない。そして愛の力よりも卑しいものの力のほうが創造的であるということに繰り返し気づいてしまっている。

彼の妹は悲しげな顔で不機嫌そうに立ち上がった。彼女は夕食をもってこさせた。召使いが部屋を後にしたとき、アンダースは言った。わかるね、僕たちが愛という大いなる状態について話しているあいだ、そのなかで十五分ごとに怒りがふくれあがってきたことが。怒りが今日はけ口をもっているということを僕たちが忘れていたからだ。僕はその怒りをどうにかして紛らわせようとしているが、どうやって僕はその事実を乗り越えればいいのか？僕はその事実をさまざまに変奏することができる。僕の魂は海岸に横たわっていて、満潮がやってくる。僕はどうやって魂をすばやく遠くへやるのか？僕は、やあ兄弟といって雄牛に話しかけるが、雄牛は僕を角に引っかいたという。僕の魂はどうするのだろうか？

——もしそうなら——アガーテはぶつきらぼうに答えた——それならどうして私たちはハーガウアーにすこし譲歩しないのかしら!? この件を片づけましょうよ!

——遅すぎるからだ!——アンダースは言った——もはや僕たちにはできない。彼なら僕らの弱腰をそのままにしてはおかないだろう。僕たちはいまや進みつけなければならないんだ!——この言葉と同時ににかが彼のなかでひらめいた。彼は幸運だった。彼の理性がこの危険な企てを信じていないからこそ、彼はもはや引き返すことができないのだから。

しかしアガーテは不安のあまり夜のとばりのなかで泣いていた。

『特性のない男』第一卷第三二章 [Lesetexte I/ 188-197] ⁽¹⁸⁾ (一九三〇年)

しかし、それによって引き起こされた嫌悪感がどれだけはげしいものであったとしても、メーテルリンクとは別の、

あの神秘の言語から成る本物の声にこれまでずっと帰らないでいたことが、ウルリッヒにはこの瞬間恥ずべきことのうに思われた。というのも、彼はそれを自分で直接理解していたからだ——いやむしろ、理解を越えて精通していたといえるだろうが、彼はこれまでその声を完全に信じていると告白する決心がつかなかった。それは——その声は、兄妹のような声音で彼に話しかけてきた。数学や科学の言語の高圧的な調子とは反対だがそれがなんであるかは言うことができない、あの暗い内面性をともなうて——彼の日々の営みの合間にある島々のように、関連がなく、めったに訪ねられることもなかった。しかし見渡してみると、彼が見知った範囲では、それらに関連があるように感じられた。あたかも、これらの島々が少ししか離れておらず、島の陰に隠れている海岸沿いに連なっているかのように。あるいは、太古に沈没した陸地の名残を示しているかのように。彼は海や霧、そして黄色がかった灰色の光のなかで眠っている低く黒い丘の柔和さを感じた。彼は海への小旅行を、「旅に出ましょう」、「気分を変えましょう」という型どりの言葉に誘い出された逃避行を思い出した。そして、はつきりとわかってしまったのだ——なんと奇妙で、滑稽なほど魅力的な体験が、その圧倒するような力でこれを最後とばかりに、似たような体験をすべて押しつけてせり出してきたことか。一瞬、二十歳の若者の心臓が鼓動した——いまとなつては、毛の生えた皮膚が年とともに分厚くなりざらついてきた彼の胸のなかで。三十二歳の胸のなかの二十歳の心臓の鼓動は、彼には若い男が大人の男にする不道德な口づけのように思われた。にもかかわらず、彼はこのときその記憶を果敢に思い出した。それは、彼が二十歳のときある女性に抱いた恋情、奇妙な結果に終わった恋情の記憶だった。その女性は年齢からして、そしてとりわけ家庭的に落ち着いていることからして、彼よりかなり年上だった。

奇妙なことに、彼は彼女の外見をぼんやりとしか思い出せなかった。一枚の生気のない写真と、彼が一人で彼女のことを思っていた時間の記憶とが、この女性の顔や服装や身のこなしや声の直接的な記憶の代わりに手繰り寄せられた。

彼女の世界は時の流れのなかでとても縁遠いものになっていたので、「あのひとは少佐夫人だった」というと彼はおかしいほど信じがたい気分になるのだった。「いまや彼女はとくに、退役大佐夫人になっているだろう」と、彼は思った。連隊内では、彼女はその道の教育を受けた芸術家でピアノの名手だが、家族の希望で仕事としての演奏はしないのだともっぱらのうわさだった。そして後にそれは彼女の結婚によつていずれにせよ不可能になった。実際、彼女は連隊の宴でひじょうに美しくピアノを奏でた。心情の谷間のうえに浮かぶ燦然たる太陽の、光線のかげやきを放ちながら。ウルリッヒは最初から彼女の実体的な存在というよりは観念としての彼女に恋したのだった。当時その名を名乗っていた少尉は、内気ではなかった。彼の目は小娘ですでに鍛えられていたし、それどころか身持ちのよい女性を相手にした場合には少なからず、彼女たちのもとへと忍んでいく軽く踏みならされた秘密の道を探し出したのだった。しかし、「大いなる愛」——それはこうした二十歳の将校たちにとつて、仮にそういう願望を持っていたとすれば、そのような恋愛沙汰とは別のものだった。それは観念だった。それは彼らの軍事作戦の射程外にあり、経験的内容にひじょうに乏しかった。そしてまさにそれゆえに、きわめて大いなる観念だけがそうであるように、眩しいほどに中身の無いものでもあった。そしてウルリッヒがこの観念を用いる可能性を生まれて初めて自分の内に見いだしたとき、それゆえやはりこうしたことが起こらざるをえなかったのである。少佐夫人にはそのさい、突然に発病する最終的なきつかけという役割だけが割り当てられた。ウルリッヒは恋の病にかかったのだ。そして、真の恋の病は所有への欲求ではなく、そつと世界のヴェールがはがれることであり、そのためには恋人の所有が喜んで断念されるので、彼女がいまだ聞いたこともないほど並はずれた粘り強いやり方で、少尉は少佐夫人に世界を解き明かしてみせた。天体とバクテリア、バルザック、ニーチェが思考の漏斗のなかで渦を巻き、彼女はその漏斗の先端が、当時の風潮で礼儀上その存在の認識を禁じられていたある差異——彼女の肉体を少尉の肉体から分かつ差異——に向けられているのを次第にはつきりと感じるようになって

た。これまで愛とはなんの関係もないと思つていたさまざまな問題と愛とが密に関係していることがわかり、彼女は困惑した。遠乗りの途中、二人が彼らの馬とならんで歩いていったとき、彼女は一瞬ウルリッヒに自分の手をゆだねたが、その手が氣を失つたように彼の手のなかに横たわつたままでいることに氣づき、驚いた。次の瞬間、彼女の手首の関節から膝まで炎が燃え上がり、稲妻が二人を打ち倒したので、彼らはあやうく道の斜面に倒れこむところだった。そして斜面の苔のなかに座りなおして、彼らははげしく口づけを交わしたが、しまいには途方に暮れてしまった。その愛があまりに大きく並はずれたものだったので、こうした抱擁の場面でおなじみのこと以外になにかを話したりしたことが、あろうことか彼らには思いつかなかつたのである。待ちきれなくなつた馬が、最後には愛する二人をこの状態から解放してやつたのだつた。

少佐夫人と若すぎる少尉との愛はその経過全体においてもはかなく非現実的なままだつた。二人は驚き、さらに何度かお互いをつよく抱きしめたりしたもの、なにかがおかしいこと、そしてたとえ衣服や道徳というあらゆる障害から解放されたとしても、彼女の方もこれからは抱擁のさいに体を押しつけたりはしないだろうと二人同時に感じていた。少佐夫人はこれまでとくになにも考えていなかった情熱というものに身を任せようとしていたが、夫のことや年齢差のために、彼女のなかにひそかに自分を責める氣持ちが鼓動した。そしてある日、ウルリッヒがとつてつけたような理由で長い休暇をとらねばならないことを伝えたとき、将校夫人は涙に暮れながらも安堵の息をついた。しかしウルリッヒはこのときすでに、ただ愛ゆえにこの愛の源の近くから一刻も早くでるだけ遠くへ行きたいという以外に望むことなどなかつたのである。彼は海岸に突き当たつて線路が途切れているところまであてどなく旅し、さらに彼が見たいちばん近い島へとボートで渡してもらつた。そしてこのたまたま辿り着いた見知らぬ場所に彼はとどまり、とりあえずの宿と食事を与えられ、その日の夜にすぐ恋人に宛てて手紙を書いた。それは一連の長い手紙の一通目となるものだつたが、

しかしこれらの手紙が出されることはなかった。

昼のあいだも彼の頭をいっぱいにしていたこの夜のしじまの手紙を、彼は後に失くしてしまった。それはその手紙の運命でもあったのだらう。はじめのうちは、彼はまだ手紙に自分の愛について多くのことを書いていたし、愛がもたらしたさまざまな考えについても書いていたが、まもなくそれは風景描写に次第に押しのけられていった。朝には太陽が彼を眠りから起こした。漁師たちが海に、女子供が家にいたときには、彼とロバが——そのロバは、島の二つの小さな村落のあいだの茂みや岩の背で勢いよく草を食んでいたのだが——この冒険的な前哨地に存在する唯一の高等生物であるように思われた。彼は相棒の真似をして岩山のひとつに登ったり、海、岩、空という仲間たちに囲まれて島の端に横になったりした。これは妄想で言っているのではない。というのも、ものの大きさがちがいが失われてしまったからである。それ以外にも同様に、精神と動物と無生物の差異もまたそのようなあらゆるものと共にあることのうちに失われ、事物のあいだのいかなる差異もごくわずかになった。完全に冷めた言い方をすれば、これらの差異は失われたわけでも少なくなったわけでもないだろうが、そこから意味が剝落し、人は「人間の設ける区別にもはや従っていないかった」。まさに、愛の神秘主義にとらえられた敬虔な人びとがそう書き記したように——そうした敬虔な人びとについて、若い騎兵少尉は当時いささかも知らなかったのではあるが。彼はこの現象についてよく考えることもなかった。いつもなら、獣の臭いの跡を追う狩人のように、観察したことのアトを追いかけながら考えるのだが。それどころか、彼はおそらくこの現象を認識してもいなかった。そうではなく、それを自分のなかに受け入れたのだ。彼は風景のなかに沈みこんだ——それもまた同じく、言葉では表現できない運ばれであった。そして世界が彼の眼を踏み越えていくたびに、世界の意味は音のない波となって内部から彼に向かって打ち寄せてきた。彼は世界の心臓に入りこんでいた。彼から遠く離れた恋人までの距離は、すぐそばの木までの距離とまったく同じだった。内なる感覚は、夢のなかで二つの存在が混じり

あうことなくお互いに通り抜けることができるように、存在どうしを空間なくして結びあわせ、両者の関係をすべて変えてしまった。その状態はしかし、そのほかに夢と共通する点はないもなかった。明晰で、明晰な考えにあふれていた。ただ、そのなかでは原因や目的、肉体的欲望にしたがって動くものはなにひとつなく、あたかも噴水が際限なく水盤へと落ちてゆくように、すべては絶えず新たなものへと変化していく円環となつて広がつていったのである。そしてまさにそれこそが彼が手紙にも書いたことであり、それ以外にはなにもなかったのだ。それは生の完全に変容したかたちであつた。そこに組みこまれたものはすべて、日常の関心の焦点から外れくつきりとした輪郭から解き放たれ、むしろいささかばんやりとしているように見えた。しかしどうやらそれは別の中心から、ふたたび穏やかな確実さと明晰さに満たされるようだった。というのも、生のあらゆる問題と出来事は、比類なき穏やかさと柔らかさと静けさを帯びると同時に、完全に変容した意味をも帯びていたからである。そこでたとえば甲虫が考えることをしている男の手のそばを通りすぎていったときには、それは接近し、通り過ぎ、離れていくということではなく、そして甲虫と人間のこともなく、言いたいほど心が揺さぶられる出来事なのだった。いや、それは出来事ですらない。それは起こつたにもかかわらず、状態なのであつた。そのような静かな経験によつて、いつもなら日常的な生を形成しているはずのものが、ウルリッヒがかかるところではすべて、世界をくつがえす意味を獲得した。少佐夫人への彼の愛もまた、その状態のなかでたちまちあらかじめ定められた形をとつた。彼はときどき、自分がたえず想っている女性のことを思い浮かべ、この瞬間に彼女がなにをしているだろうかと思像してみた——彼女の生活状況に精通していたために彼はこうすることができたのである。しかしそれが成功し彼が恋人の姿を目の当たりにするやいなや、これほど果てしなく見通せるようになった彼の感情は盲目になり、大いなる恋人がどこかで彼のために存在しているという至福の確信に、急いで彼女の姿を引き戻そうと腐心せねばならなかつた。ほどなく、彼女は名前をもたないエネルギー中枢に、彼の照明装置の地下に埋められ

たダイナモになりきった。そして彼は彼女に最後の手紙を書き、そこで彼女に、愛に生きるという大いなる営みは、本当は所有や「我がものであれ」という願望とはまったくなんの関係もないのだ、そのような願望は儉約と横領と大食の領域に由来するものだと説いた。それは彼が出した唯一の手紙であり、彼の恋の病のほぼ頂点に位置していたが、その後すぐそれは終わり、突然の中断を迎えた。

四 三つのテキストの要素分析——性愛と神秘体験を中心に

『*Statt*』と『*Statt*』、そして『特性のない男』第一卷第三章（以下、第三章と略記）の翻訳を通して、この三つのテキストの類似と相違が見えてきただろうか。たとえば『*Statt*』が、ウィルキンズが言うように「そこで主人公アンダーズは（……）ほぼ正確に『特性のない男』第一卷第三章と同じ言葉を述べていた」わけではないことはすでに明らかだろうが、それ以外にも多くの類似と相違がこの三者の間にはある。それを私たちの視点で整理し「要素分析表」として図式化したので、以下に提示してみたい。（略号は以下のとおり。AⅡアンダース、UⅡウルリッヒ、AgⅡアガート）

要素分析表

	s ₃ +n-1	s ₃ +9	第三章
①体験の想起	突然思い出す。	AはAgと一緒に家にいて、Agに話しはじめる（＝一人称の語り）。	メーテルリンクの言葉からの連想で想起。 圧倒するような力で、似たような体験をすべて押しつけてせり出してくる。 忘れられており、思い出すのを避けてきた。
②夫人との出会い	とても若い士官。 田舎での休暇中に言い寄る。 ヴァレーリエという名。	まだ二十歳になっていない士官。 休暇中に、偶然湯治場で出会う。	二十歳の少尉。 （おそらく連隊内での服務中）
③夫人の人物像	上司である騎兵大尉の妻。 善良な妻。心やさしい女性。 Aに以前から好意を示していたが、若い坊やと関係をもつのはためらわれる。	Aより年上。 騎兵中隊指揮官の妻。 きちんとした女性。 Aのことが好きだったが、若い坊やと関係をもつことは倒錯だと思ふ。	年齢的にも家庭的に落ち着いているさまからしても、Uよりかなり年上。 少佐夫人。その道の教育を受けたピアニスト。

④当時のA／Uの女性関係	女性を求め所有したことがすでにあったし、さまざまに恋をしたことがあった。 「僕は愛している」と言えるような恋愛はまだ。	まだ恋をしたことがなかった。 「大いなる愛」を体験しないわけにはいかなどと感じていた。	内気ではなく、小娘で練習を積み身持ちのよい女性とも通じていた。 「大いなる愛」はまだ。恋の病にかかる最終的なきつかけとしての夫人。 真の恋の病においてはそつと世界のヴェールがはがれ、恋人の所有が喜んで断念される。
⑤夫人との出来事	普通ではない話、夫人の世界には存在しない哲学的で情熱的な話をして彼女を困惑させる。 散歩の途中、Aは夫人の手を握ろうとし、夫人はAに手をゆだねる。 炎が腕から膝まで燃え上がり、愛の稲妻に打ち倒されたので、道の斜面に倒れこみそうになる。 道の斜面の苔のなかではげしく抱きあう。	普通ではない話、夫人の世界には存在しない哲学的で情熱的な話をして夫人を困惑させる。 散歩の途中、Aは夫人の手を握ろうとし、夫人はAに手をゆだねる。 炎が腕から膝まで燃え上がり、愛の稲妻に打ち倒されたので、道の斜面に倒れこみそうになる。 道の斜面の芝のうえでげしく抱きあう。	夫人がいまだ聞いたこともないほど並はずれた粘り強いやり方でUは夫人に世界を解き明かすが、夫人はさまざまな問題と愛とが関係していることに困惑する。 会話がUと夫人の肉体上の差異に向けられていることを夫人は感じる。 遠乗りの途中、夫人はUに手をゆだねる。 炎が手首の関節から膝まで燃え上がり、愛の稲妻に打ち倒されたので、道の斜面に倒れこみそうになる。 道の斜面の苔のなかで口づけを交わすも、途方に暮れる。

⑥夜 (夫人)	情欲に襲われ身悶えするも、その渴きを潤す奔流があふれ出るかと思ふと不安を覚える。 男の若さと夫ゆえに自分を責める。	「明日、一緒に逃げよう」とAが言い、別れる。
⑦夜 (A／U)	情熱的な考えに揺さぶられていた眠れない夜。 夫人からますます遠くへ運び去られる。 夫人はきつかけにすぎず、Aの体験の中身ではないことを自覚。 (夫人から離れる) 決心をする。	何度か互いを抱きしめようとするも、違和感を覚える。 二人の愛ははかなく非現実的なまま。
	情欲に襲われ身悶えするも、ダムを決壊させるほどの情熱の奔流があふれ出るかと思ふと不安を覚える。 自分を責める。	情熱に身を任せようとする。
	夜は眠れず、心のなかに嵐が吹き荒れる。 「逢方もない」決心でいっぱい。 夫人からますます遠くへ運び去られる。 夫人はきつかけにすぎず、Aの体験の中身ではないことを自覚。	夫のことや年齢差のために自分を責める。

⑧夫人とA／Uの別れ	あまり手紙を書かないようにしようと言う。 手紙のなかで、夫人への愛を何度も誓いつつ別れを告げる。 夫人は涙に暮れながらも安堵の息をつく。	「すべては手紙に書くよ」という言葉のみを残す。 夫人は涙に暮れながらも安堵の息をつく。	ただ愛ゆえに、愛の源から一刻も早くできるだけ遠くへ行きたいとしか考えていない。 とってつけたような理由で長い休暇をとることを告げる。 夫人は涙に暮れながらも安堵の息をつく。
⑨A／Uの旅	リュックサックだけをもつ。 鉄道で短い距離を行き、人気のない谷を抜けて歩く。	わずかな荷物をもつ。 鉄道で短い距離を行き、そこから歩く。	鉄道で海岸沿いまで行き、そこからボートで海を渡り島へ。
⑩神秘体験の場所・季節	山岳地帯にひっそりと存在する小さな巡礼地。 訪問者もいなければ、住人もほとんどいない。 季節は初秋。	山岳地帯の小さな寂れた巡礼地。 訪問者もいなければ、住人もほとんどいない。 季節は初秋か晩夏。	島。 漁師や女子供が住む村落がある。ロバがいる。
⑪その場所でしたこと	宗教の啓示のような手紙を書くが、それを送るのをためらう。 太陽に朝体を起こされ、高台の木のもとへと連れていかれる。 我を忘れながら一日に何度か場所を変え、持ってきた本を読む。	クモの糸のように引き上げられ運ばれるままに移動する。 我を忘れながら一日に何度か場所を変え、持ってきた本を読む。	夫人に手紙を書くが、ほとんどは出さないまま。 太陽に朝起こされる。 ロバの真似をして岩山にのぼったり、島の端に寝転がったりする。

そこでしたことは純粋な無。	そこでしたことは純粋な無。
精神が深いところで動いてはいるものの、普段のように思考が積み上げられることはない。 新しい考えが古い考えのピラミッドの上に降り積もる。最下層にある考えは肉や血、頭蓋、支えとなる筋肉の靱帯とひとつになる。 風景が自分の外にあるとも内にあるとも思えず、その区別は溶解する。	本の中の人物、作者、自分との境界が解消。 本の中の人物は錆びついた殺人間で、やさしさと思考の海の底にある。Aもその海の一部。
海と岩と空に包まれる。 ものの大きさがいや、精神と動物と無生物の差異から意味が剥落。「人は人間の設ける区別にもはや従っていないかった」という神秘家の言葉。 この現象を認識するのではなく、それを自分のなかに受け入れる。 風景のなかに沈みこむ、言葉では表現できない運ばれ。 世界が眼を踏み越えていくたびに、その意味は音のない波となって内部から打ち寄せる。	内なる感覚が存在どうしを空間なくして結びあわせ、両者の関係をすべて変える。

世界の心臓に入りこむ。 恋人までの距離は足元の草までの距離と同じで、遠い木までの距離と同じ。	世界の心臓に入りこむ。 恋人までの距離は足元の草までの距離より遠くはなく、夜の星までの距離より近くもない。	世界の心臓に入りこむ。 遠く離れた恋人までの距離はすぐそばの木までとまったく同じ。
考えているのではなく、着想の方がやってくる。絶え間なくあふれ出て新たなものへと変化しながら、噴水が広がり落ちるように。	Aは火にくべられた薪のように世界で燃え、世界はAによって燃え上がる。 本に起こったことがすべての事物に起こる。 木は木であるために必要なものをもっているわけではなく、みずからを与えそれと引き換えに視力をAから受けとる。 すべては名状しがたいほど流動的な精神の液体で、固い沈殿物はやさしい波から分かれていない。	その状態は明晰で、明晰な考えにあふれている。 そのなかでは噴水が落ちていくようにすべては新たなものへと変化していく円環となつて広がっていく。

着想は空の雲のように変化しつづけるが、そのなかでは何も変化しない。青い深海も、真珠の魚も。

獣が森の中から出てきたり、雌牛が草を食むそばを人間が通り過ぎたりするも、脈が打つ以上のことは何も起こらない。

分離によって動物の皮と死肉とが分かれるが、この状態にあつてはこれらは心臓と結びつく。

自分になにかが襲いかかってくることは起こりえない。

恋人は見知らぬ放浪者よりも近くはない。

すべては惹起だが、確固たるものはなにもない。

変わらず真であるものではなく、すべては真実らしいもの。

獲得してきた知識は死んだように消え去り、いつもの厳密さは避けられる。

Aを恍惚とさせたものは次の瞬間には沈黙し、日常の相貌へと頹落する。

何かが起こったとしても、それは永遠に変化しつづける雲のように流れていく。が、そのなかでは何も変化しない。青い深海も、真珠の魚も。

獣が森の中から出てくるも、脈が打つ以上のことは何も起こらない。

夫人の周りの世界を想像すると、
見知らぬ世界を通して見たときの
ようになってしまう。

原罪はなく、邪悪なことはそもそも
考えられない。炎を燃やしてい
るものしか見えない愛の世界。

生の完全に変容したかたち。生の
あらゆる問題と出来事は、比類な
き穏やかさと柔らかなさと静けさ
と、完全に変容した意味をも帯び
ている。
そこに組みこまれたものはいささ
かぼんやりとしているように見え
るが、別の中心から穏やかな確実
さと明晰さに満たされる。
甲虫が手のそばを通り過ぎていく
とき、それは接近し、通り過ぎ、
離れていくということではなく、
そして甲虫と人間のことでもな
く、言いたいほど心が揺さぶら
れる出来事。それも出来事ではな
く状態。
日常的な生を形成しているもの
も、Uがかかるところでは世界
をくつがえす意味を獲得する。
夫人が何をしているか想像すると
彼の感情は盲目になり、大いなる
恋人がどこかで彼のために存在し
ているという至福の確信に彼女の
姿を引き戻そうと腐心する。

		夫人の所有という考えほど遠くにあるものはない。それは吸いこんだ淨福な空気を所有することと同じくありえない。 もし彼女がだれかほかの男に身を捧げていると知ったならば、その男のふるまいは彼女に値するかと問うだけ。	愛に生きるという大いなる営みは、本当は所有や「我がものである」という願望とはなんの関係もない。そのような願望は儉約と横領と大食の領域に由来するものである、と手紙を書く。
⑬体験の終わり	地下に隠れた別様のありかたで、夫人と結びつく。	ある日過ぎ去ってしまう。 神に相對した天使たちの状態。鬱屈した、中身の無い、息の詰まるような物思ひだけが残る。 神は世界を動かすために悪事、貧困、暴力、利己心、卑劣、金を必要としているのだと確信する。 数週間後夫人をきわめて卑俗なやり方で恋人にする。 Aは魂を失う。 それ以降起こったことはただAの傍らを通り過ぎるだけ。 愛の力よりも卑しいものの力の方が創造的であると気づく。	夫人は名前をもたないエネルギー中枢に、彼の照明装置の地下に埋められたダイナモになる。 すぐに終わり、突然の中断を迎える。

右の要素分析表から、目を引く点に限定してテキスト間の類似と相違を見ていこう。

②夫人との出会い

夫人と出会ったときのアンダース／ウルリッヒはいずれも若い士官だが、^{„Sutth“}のアンダースは年齢不詳の「とても若い士官」、^{„St+g“}のアンダースは「まだ二十歳になっていない士官」、ウルリッヒは「二十歳の少尉」と、年齢の提示に微妙な違いが見られる。出会った場所も、順番に「田舎での休暇中」「休暇中に、偶然湯治場で」「おそらくは連隊内での服務中」とそれぞれ異なっている。

③夫人の人物像

アンダース／ウルリッヒの恋の相手が草稿段階から一貫して「年上」の上司の妻であることがわかる。ただし、上司の階級は異なっていて、それに応じて夫人の名称も「騎兵大尉の妻」(^{„St+H“}) → 「騎兵中隊の指揮官の妻」(^{„St+g“}) → 「少佐夫人」(第三章)と変遷する。人柄としては、^{„St+H“}では「善良な妻。心優しい女性」だったものが、^{„St+g“}では「きちんとした女性」となり、第三章にはそのような性格描写はとくだん見当たらない。その代わりに、「その道の教育を受けたピアニスト」という説明が加わり、これは^{„St+H“}の「ヴァレーリエ」という名と呼応して、〈少佐夫人の物語〉の背後にムージル十九歳のときの（おそらくは一方的な）恋の相手であるヴァレーリエ・ヒルパートの存在を浮かび上がらせる。一九〇〇年の晩夏、シュタイアマルク州の避暑地シュラートミシングでムージルが出会ったヴァレーリエは当時二八歳。ムージルより「かなり年上」で、かつてオーストリア皇帝の誕生日にリストを弾いて絶賛を博したこともある「ブリリアントなピアニスト」⁽¹⁹⁾だった。

④ 当時の A / U の女性関係

「まだ恋をしたことがなかった」^{„sich“}のアンダースを除き、^{„sich“}のアンダースと第三章のウルリッヒは、少佐夫人と出会うまえに女性経験がある。アンダースは「女性を求め所有したことがすでにあったし、さまざまに恋をしたことがあった」。ウルリッヒは「小娘で練習を積み身持ちのよい女性とも通じていた」。だが二人とも——^{„sich“}のアンダースを入れると三人とも——「大いなる愛 (große Liebe)」と呼ぶる関係をこれまで女性との間に取り結んだことはない。ただし、彼らの考える「大いなる愛」の内実はそれぞれ微妙に異なっていて、^{„sich“}のアンダースにとってそれは「大人たちの世界を、この世界を丸ごと所有したいという無邪気な尊大さ (der kindliche Stolz die Welt der Erwachsenen, die volle Welt besitzen zu wollen)」(Mappe VII/8/38) と抱き合わせに「僕は愛している」と言えるような愛であるのたいし、^{„sich“}のアンダースにとってのそれは「心を拉し去るような情熱」(Mappe VII/9/124) である。そしてウルリッヒにとって「大いなる愛」は「観念 (Begriff)」、「眩しいほどに中身の無い」(Lesetexte I/193) 観念であった。女性経験の有無と照らし合わせると、まだ恋をしたことのない^{„sich“}のアンダースだけがそれを「情熱」と呼び、世俗的な恋愛の経験者である^{„sich“}のアンダースとウルリッヒは、感情レベルの「情熱」とは異なる「観念」の位相でその「大いなる愛」を捉えている。アンダースは観念による世界支配との関連で、ウルリッヒは「真の恋の病は所有への欲求ではなく、そっと世界のヴェールがはがれることであり、そのためには恋人の所有が喜んで断念される ([…]) echte Liebeskrankheit kein Verlangen nach Besitz ist, sondern ein sanftes Sichentschleimen der Welt」(Lesetexte I/193) とくく詩的・形而上学的概念とともに。そこには、しばしば口にされる世間知——若い頃の観念的な愛から年齢を重ねての世俗的な愛へ——とは逆に、世俗的愛を経て、その上位に観念的愛を描定しようとする方向性を見て取ることができる。しかもウルリッヒの場合、それが「所有への欲求」を断念する点で、リルケの「所有なき愛 (besitzlose Liebe)」^(a)を想起

させるものにまで高められている。これは後日、島での神秘体験にも受け継がれる、肉体性をもたないムージルの〈遙かな愛〉の中核をなす観念だと言ってよい。

⑤夫人との出来事

アンダース／ウルリッヒが夫人との会話で「普通ではない話、夫人の世界には存在しない哲学的で情熱的な話をして夫人を困惑させる」点について、三者はほぼ共通している。ただし、夫人の受け止め方として、ウルリッヒの少佐夫人の場合には「これまで愛とはなんの関係もないと思っていたさまざまな問題と愛とが密に関係していることがわかり」(Lesetexte V/193f.)と、困惑の理由が付されている。これはウルリッヒの話が哲学的な意匠をまといつても、その本質が愛のテーマにあったことを明示する方向に修正が施されたと考えていいかもしれない。

また、散歩ないし遠乗りの途中でアンダース／ウルリッヒが夫人の手を握ろうとし、夫人もまたみずから手をゆだねるところまで、三者はほぼ共通している。「次の瞬間、炎が腕から膝」[第三章では「手首の関節から膝」]まで燃え上がり、二人を愛の稲妻が打ち倒したので、彼らはあやうく道の斜面に倒れこむところだった」(Mappe VII/8/39, VII/9/125, Lesetexte V/94) というのも同じである。異なるのは、そのあと ^{ss+9}ss+9^{ss+9} / ^{ss+9}ss+9^{ss+9} では「そして斜面の苔のなかに座って」(「[...]in dessen Moos sie #dam# nun saßen) [^{ss+9}ss+9^{ss+9} / ^{ss+9}ss+9^{ss+9}では「斜面の芝のうえに座りなおして」(「[...]auf dessen Rasen wir zu sitzen kamen)」「彼らははげしく抱きあった」(Mappe VII/8/39, VII/9/125) とあるのにたいし、第三章では「そして斜面の苔のなかに座りなおして、彼らははげしく口づけを交わしたが、しまいには途方に暮れてしまった。その愛があまりに大きく並はずれたものだったので、こうした抱擁の場面でおなじみのこと以外になにかを話したりしたりすることが、あろうことか彼らには思いつかなかったのである」(「[...]in dessen Moos sie nun zu sitzen kamen,

sich leidenschaftlich küssen und schließlich verlegen wurden, weil die Liebe so groß und ungewöhnlich war, daß ihnen zu ihrer Überraschung nichts anderes zu sprechen und tun einfiel, als man bei solchen Umarmungen gewöhnt ist」(Lesetexte I/194) である点である。二つの草稿が情熱的な抱擁とどういういかにもありふれた世俗的愛の行為で終わっているとすれば、第三章では情熱的な抱擁と口づけのあと、ウルリッヒと少佐夫人は、世俗的な愛をはるかに越えるその愛の大きさに圧倒されてどうしていいかわからない。さらには、その後も二人の愛は「はかなく非現実的な (kurz und unwirklich)」ままだった、と言われる。「二人は驚き、さらに何度かお互いをつよく抱きしめたりしたものの、なにかがおかしいこと、そしてたとえ衣服や道徳というあらゆる障害から解放されたとしても、彼女の方もこれからは抱擁のさいに身体を押しつけたりはしないだろうと二人同時に感じていた (Sie staunten beide, sie preßten sich noch einmal aneinander, sie fühlten beide, daß etwas nicht in Ordnung sei und sie auch dann nicht bei ihren Umarmungen Leib an Leib kommen lassen würde, wenn sie sich aller Hindernisse der Kleidung und Stille entledigten)」(Lesetexte I/194)。繰り返される抱擁にもかかわらず、ウルリッヒと少佐夫人はそれ以上の性的行為に踏み込めない。しかもそれは「衣服や道徳」の制約によるものではない。その理由は明示されないものの、ここには草稿段階での素朴な愛の行為を拒む、〈脱性愛〉とも呼ぶべき現象を見て取るべきとができる。

⑥夜(夫人)

前項で述べた〈脱性愛〉と呼びうる現象は、その夜の夫人の描写(の有無)にいつそう明瞭に見て取ることができ。"Stille"の騎兵大尉夫人も"Stille"の騎兵中隊指揮官夫人も、散歩の途中アンダーズと「はげしく抱きあった」日の夜、官能の疼きにベッドでひとり身悶えする。「目覚めさせられたもののなお ["Stille"では「なお」はない] 満たされ

ることのない情欲に襲われて、その女性は「*s+g*」では「僕の上司の妻」喉の渇きのように渇いた体をかかえてベッドのなかで身悶えしていた（Die geweckte und \ noch | nicht gestillte Begierde warf die Frau trocken wie Durst im Bett hin und her「*s+g*」²⁴）「die Frau meines Vorgesetzten」#von der# \ hatte die | geweckte#n#, aber nicht gestillte#n# Begierde \「die Frau meines Vorgesetzten」| trocken wie Durst im Bett hin und hergeworfen」（Mappe VII/8/39, VII/9/125）。

つづけて、*s+n*の騎兵大尉夫人はこう描写される。「しかし同時に、明日にはその渇きを潤すはずの奔流が洪水のように突然あふれ出るかと思うと、彼女は不安になった（zugleich ängstete sie aber der Strom, der morgen ihre Lippen netzen sollte, durch seine überschwemmungsartige Plötzlichkeit）」（Mappe VII/8/39）。「Strom」とLippenを抽象的に訳せば「なるが、明日にはその渇きを潤す（彼女の唇を濡らす）はずの奔流」とは何か。別れ際、アンダースは夫人に「明日、一緒に逃げよう」と言っていた。つまり夫人は明日、騎兵大尉の夫を裏切って若いアンダースと愛の逃避行に出奔するのである。そのことを思っぴひとり情欲に身悶えしている夫人の「唇」を明日濡らすであろう「奔流」として、この状況下で具体的に想定されるのは、アンダースの愛撫に情欲を満たされた夫人の「恥唇（Schamlippen）」を濡らす「愛液（Liebestrom）」のことではないだろうか。であれば、この一文は——あたかも官能小説のように——こう訳することもできるだろう。「しかし同時に、明日にはその恥唇を濡らすはずの愛液が洪水のように突然あふれ出るかと思うと、彼女は不安になった」。

*s+g*の騎兵中隊指揮官夫人の場合は、こうである。「同時に、次の日にはダムを決壊させるはずの情熱の奔流が洪水のように突然あふれ出るかと思うと、彼女は不安になった（zugleich ängstigte sie der Strom von Leidenschaft, der am nächsten Tag die #letzten# Dämme durchbrechen sollte, durch seine überschwemmungsartige Plötzlichkeit）」（Mappe VII/9/125）。こゝでも抽象的に「ダムを決壊させるはずの情熱の奔流」と訳したが、*s+n*のStromが愛液であったとすれば、「情

熱の奔流」も「情熱の愛液」となる。それに呼応するように、ここにはもうひとつ、性的な含意をはらんだ言葉が使われている。ドイツ語の *Damm* には解剖学用語の会陰 (*Perineum*) という意味があり、*die Dämme durchbrechen* をこの意味でとると、「会陰を押し流す」ないしは「会陰をしとどに濡らす」となる。であれば、この一文は——あたかもポルノグラフィーのように——こう訳することもできるだろう。「同時に、次の日には会陰をしとどに濡らすはずの情熱の愛液が洪水のように突然あふれ出るかと思うと、彼女は不安になった」。ムージルの草稿に当初あった *die letzten Dämme* の *letzten* が削除されたのも、この解釈を裏付けるものと見なしうるだろう。「最後のダムを決壊させる」は理解できても、「最後の会陰をしとどに濡らす」では意味をなさない。それゆえムージルは、一度書いた *letzten* を削除したのではないだろうか。

このように、草稿段階では官能小説ないしポルノグラフィーと見まがう意味を含意していた夫人の夜の描写が——「目覚めさせられたもののお満たされることのない情欲に襲われて、その女性には喉の渇きのように渇いた体をかかえてベッドのなかで身悶えしていた」という、本項の冒頭で述べた一節とともに——完成稿の第三章では完全に抜け落ちていく。言われるのはただ、遠乗りの途中で口づけを交わしたのち、「少佐夫人はこれまでとくになにも考えていなかった情熱というものに身を任せようとしていた (*Die Frau Major wollte sich einer Leidenschaft nicht verweigern, über die sie kein Urteil zu haben fühlte*)」(*Lesetexte V* 194) ということだけである。第三章を書く段階のムージルには、少佐夫人体験に草稿段階で含まれていた濃密な性的要素を排除しようという意思があったように思われる。

⑦夜 (A/U)、⑧夫人とA/Uの別れ

同じ日の夜、アンダースもまた「眠れない夜」を過ごしていた。³⁵ *starr* のアンダースは「情熱的な考えに揺さぶら

れて、^{„st+9“}のアンダースは「心のなかに嵐が吹き荒れ」て。少佐夫人の官能シーンを削除した第三章には、それに対応してウルリッヒの夜の記述はない。

この夜の描写で注目すべきは、^{„st+n-1“}のアンダースが夫人との逃避行を約束していたにもかかわらず「彼女からますます遠くへ運び去られた」(「...war er immer weiter von ihr fortgetragen worden」) (Mappe VII/8/39) と感じており、^{„st+9“}のアンダースも「僕はこの夜彼女からますます遠くへ運び去られた (ich war in dieser Nacht immer weiter von ihr fortgetragen worden)」 (Mappe VII/9/125) と言っている点である。いずれも「彼女はただのきっかけにすぎず、彼の突然の体験の中身ではない」(Mappe VII/8/39, VII/9/125) へと関連づけられていることであるが、第三章のウルリッヒは（この夜ではないものの）少佐夫人との別れに際して「ただ愛ゆえにこの愛の源の近くから一刻も早くできるだけ遠くへ行きたい」(「...」 Wunsch [...] vor lauter Liebe so rasch und weit wie möglich aus der Nähe des Ursprungs dieser Liebe zu kommen) (Lescléxie I/ 194) と思う。「彼女からますます遠くへ運び去られた」という受動態から、みずからの意思で「ただ愛ゆえに」愛する女性から離れて「できるだけ遠くへ行きたい」という能動態へ——この変化は注目に値すると同時に、西欧の愛の原型ともいえるべき〈遙かな愛〉(Fernliebe) との連関をも示唆している。

「愛は十二世紀の発明である」(シャルル・セニョボス) という言葉が指し示すように、十二世紀のトルバドゥールたちは、古代世界や従来のキリスト教世界には存在しなかったまったく新しい愛の形を見いだした。彼らは世俗的愛における肉体の接触を前提とせず、それどころか愛する女性から遠ざかることによって、性愛を超える精神的な愛を求めようとしたのである。ドニ・ド・ルージュモンによって「伝説」として紹介されたトルバドゥール、ジョフレ・リュデルは「遠い恋人」に憧れ、「遙かなる恋」のもたらす喜びをうたったが、⁽²¹⁾ ついには「かつてその姿を見たこともない女性に愛を抱いたその果てに、海を渡った彼方でもうやくその思い描いていた人に出あった。彼はトリポリ伯爵夫人のただ

一回の和合の接吻に救いを得て、夫人の腕に抱かれたまま息絶えたという⁽²²⁾。これをルージュモンは「遙かなる恋⁽²³⁾」を美しく巧みに歌った彼の詩篇から作り出された伝説⁽²⁴⁾と云うのだが、同時にそれは「肉体の牢獄に閉じこめられた人間の魂が、憧憬的愛をいだいて」まだ見ぬ恋人を求めた「靈的事件⁽²⁵⁾」でもあったと言う。トルバドゥールをマニ教の流れをくむ異端カタリ派の「平信徒⁽²⁶⁾」と見なすルージュモンは、肉体の接触を拒むトルバドゥールの「遙かな愛」のなかに、異性との接触を禁じ、結婚を「神の名による姦淫⁽²⁷⁾」と呼んだカタリ派の教義を読みとり、その「神秘的」な調べをカタリ派の神秘主義的教説と重ね合わせるのである⁽²⁸⁾。

このルージュモンの考えに呼応するかのように、〈遙かな愛〉によって恋人である夫人のもとを去ったアンダース／ウルリッヒは、一人での逃避行の様相を呈する旅の果てに、たどり着いた山岳地帯／島で神秘の体験をすることになる。夫人はその体験の「きっかけ」に過ぎないと言って受動的に夫人から「遠くへ運び去られた」アンダースと、「ただ愛ゆえに」能動的に少佐夫人から離れて「できるだけ遠くへ行きたい」と意思したウルリッヒとで、その神秘体験の内実にちがいはあるのだろうか。

⑩ 神秘体験の場所・季節

夫人のもとを去ってアンダース／ウルリッヒが向かうのは、^{„s+t+n“}と^{„s+t+o“}では「山岳地帯」の寂れた巡礼地であるが、第三二章では「島」である。ウィルキンズはそれが「地中海の」島であることを示唆しているが、その根拠は明らかではない。おそらくは草稿^{„s+t+n“}に描かれた「楽園への旅」を念頭において言っているのであろう。季節は^{„s+t+n“}が「初秋」、^{„s+t+o“}は「初秋か晩夏」、第三二章には季節にかんする記述はない。

⑫ 神秘体験

„st+n-1“、„st+9“、第三二章のあいだには、その神秘体験にいくつかの共通点がある。第一に、アンダース／ウルリッヒは「世界の心臓に入りこんでいた」〔…〕war ins Herz der Welt geraten) (Mappe VII/8/40, Mappe VII/9/126, Lesetexte I/196)。その結果生じるのは、空間認識の変容である。„st+n-1“のアンダースの場合、「彼から恋人までの距離は足元の草の茎までの距離とまったく同じであり、あるいは谷の向こう側の天まで届きそうな不毛の高地にそびえる遙かな木までの距離とまったく同じだった (Von ihm zur Geliebten war es ebenso weit wie zu dem Grashalm bei seinen Füßen oder zu dem fernem Baum auf der himmelskahlen Höhe jenseits des Tals)」(Mappe VII/8/40)。“st+9”のアンダースの場合は「僕から遙かな恋人までの距離は足元の草の茎までの距離より遠くはなかったし、夜の星までの距離より近くもなかった (Von mir zu der fernem Geliebten war es nicht weiter als zu dem Grashalm bei meinen Füßen und nicht näher als zu den Sternen in der Nacht)」(Mappe VII/9/127)。(21) そして第三二章のウルリッヒにおいては、「彼から遠く離れた恋人までの距離は、すぐそばの木までの距離とまったく同じだった (von ihm zu der weit entfernten Geliebten war es ebenso weit wie zum nächsten Baum)」(Lesetexte I/196)。内容的にはいずれも自分と恋人までの距離感覚の変容について語っているが、“st+9”と第三二章にはそれぞれ「遙かな恋人まで (zu der fernem Geliebten)」(zu der weit entfernten Geliebten)」という、〈遙かな愛〉をつよく連想させる言葉が使われている。

第二に、変容した空間に「噴水」の形象が出現する。„st+n-1“のアンダースには「着想がやってくるのだった——絶え間なくあふれ出て新たなものへと変化しながら、満杯の器へと噴水が広がり落ちるように (die Einfälle kamen wie ein Strahl in ein volles Gefäß, in endenlosem Überfließen und Erneuern)」(Mappe VII/8/40)。“st+9”のアンダースが体験するのは次のような事態である。「すべては名状したいほど流動的な精神の液体のようであり (……)。力強い動きが

絶えず新たに生まれでる円環となつて広がつたが、それが向かう先は定かではなかつた (Alles war wie eine unsagbar bewegliche geistige Flüssigkeit [...]. Eine starke Bewegung breitete sich in immer neuen Kreisen aus, aber hatte kein Ziel) (Mappe VII/9/126-127)。そして第三章のウルリッヒを包みこむのは次のような「状態」である。「その状態は(……)明晰で、明晰な考えにあふれていた。ただ、そのなかでは原因や目的、肉体的欲望にしたがつて動くものはないとひとつなく、あたかも噴水が際限なく水盤へと落ちてゆくように、すべては絶えず新たなものへと変化していく円環となつて広がつていったのである (Der Zustand [...] war klar und übergall von klaren Gedanken; bloß bewegte sich nichts in ihm nach Ursache, Zweck und körperlichem Begehren, sondern alles breitete sich in immer erneuten Kreisen aus, wie wenn ein Strahl ohne Ende in ein Wasserbecken fällt)」(Lesetexte I/196)。このように「噴水」の形象は、当初「着想」の比喩だったものが「流動的な精神の液体」となり、第三章にいたつて「状態」として表象される。それがムージルの神秘主義的核概念としての〈別の状態〉(der andere Zustand)であることはいうまでもないが、そこでは「原因や目的」とならんで「肉体的欲望」もまた排除されていることに留意しておこう。ルージューモンの見るトルバドゥールは、「肉体的欲望」を否定するカタリ派の「平信徒」であり、彼らの理想とする〈遙かな愛〉はその精神的な愛を「神秘的な」調べにのせてうたうものであつた。ウルリッヒもまた「肉体的欲望」を排除した〈遙かな愛〉のなかで、神秘体験をするのである。

次に、^{„st+h-1“}と^{„st+9“}にあつて、第三章にない要素を見てみよう。^{„st+h-1“}と^{„st+9“}にはともに「獣(Tier)」が出てくる。^{„st+h-1“}から引用すると、「一匹の獣が森のなかから出てきたが(……)なにかが変化するということもなかつた。一匹の雌牛が近くで草を食み、そこを人間が通り過ぎたが、それとともにただ脈が打つ以上ことは起こらなかつた。静かに理解の壁を打つ、無限に続く生命の流れが生みだすほかのすべての脈動とまったく同じように——そんなことが起こりえたのだ」(Mappe VII/8/40)。^{„st+h-1“}ではむしろに、アンダースが「世界の心臓に入りこんでいた」際に次

のようことが言われる。「奇妙な思考——（……）それは温かな皮を剥ぎとり死肉を残すが、ここ心臓のなかではそれらはもはや皮や死肉ではなく（……）すべては心臓と結びついていたのだ」（Mappe VII/8/40）。また、別の箇所には神秘体験のさなかの思考の変容について「新しい考えが絶えず古い考えのピラミッドの上に降り積もり、その古い考えは最下層でますます固くなり、最後には肉や血、頭蓋、支えとなる筋肉の靱帯とひとつになる」とも言われている。こうした「獣」の出現や「皮」「死肉」「肉や血」「頭蓋」「筋肉の靱帯」といった生々しい肉体の表象は、第三章には見られない。

その一方で、*„stark“* にも *„stark“* にもなくて第三章ではじめて現れる要素がある。ウルリッヒが鳥での生活を続けるうちに、「精神と動物と無生物の差異もまたそのようなあらゆるものと共にあることのうちに失われ、事物のあいだのいかなる差異もくわすかになった。完全に冷めた言い方をすれば、これらの差異は失われたわけでも少なくなつたわけでもないだろうが、そこから意味が剥落し、人は「人間の設ける区別にもはや従っていなかった」。まさに、愛の神秘主義にとらえられた敬虔な人びとがそう書き記したように（「[...] sich [...] auch der Unterschied zwischen Geist, tierischer und toter Natur in solchen Beisammensein verlor und jede Art Unterschied zwischen den Dingen geringer wurde. Um das ganz nüchtern auszudrücken, diese Unterschiede werden sich wohl weder verloren noch verringert haben, aber die Bedeutung fiel von ihnen ab, man war »keinen Scheidungen des Menschentums mehr untertan«, so wie es die von der Mystik der Liebe ergriffenen Gottgläubigen beschrieben haben）」（Lesetexte I/ 195）といわれる事態が生じるのである。ここに記された「人間の設ける区別にもはや従っていなかった」という言葉はマルティーン・ブーバーの編んだ『忘我の告白』（一九〇九）からの引用で、本来ブーバーは「老子とその弟子たちの言葉」として掲載しているが、それをムージルは「愛の神秘主義」の言葉として《少佐夫人の物語》の神秘体験の描写に埋めこんだのである。これまでもトルバドゥールの《遙かな愛》との

関連でウルリッヒの少佐夫人体験をとらえてきたが、ここでもウルリッヒの神秘体験は〈遙かな愛〉と密接な関係があると言えそうである。

⑬ 体験の終わり

神秘体験は永続しない。必ず終わりを迎えるのだが、それについての叙述が^{s₁+n-1}と^{s₁+9}とではまったく異なり、第三二章でもまた大きく異なっている。^{s₁+1}では体験の終わりとして格別のことは記されていない。ただ末尾で「下に隠れたまったく別様のありかたで彼は彼女と結びついていたのである（「…」 während er \in | unterirdischer Weise ganz anders mit ihr zusammenhing）」(Mappe VII/8/41) と言われるだけである。それが^{s₁+9}ではかなり詳しくこう述べられている。「それが終わったかつて？ うん、ある日それはまさに過ぎ去ってしまったんだ。夜のうちに割れた鏡のように、朝起きたら破片となっていた。（……）ある日気がつくと、そこにあるのは鬱屈した、中身のない、息の詰まるような物思っただけだった。（……）僕はふたたび世間に、つまり僕の連隊に戻った。あのひとと再会したとき僕の心は冷たくなり、数週間後彼女をきわめて卑俗なやり方で僕の恋人にした。（……）僕はあの日、魂を失ってしまったのだと思っている。（……）その後僕に起こったことは、なんであれ僕とは関係なく傍らを通り過ぎていった。ただ表面を通り過ぎるだけなのだ。僕は幸福ではなく、ある目的にたどりつく可能性を見出すこともない。そして愛の力よりも卑しいものの力のほうが創造的であるということに繰り返し気づいてしまっている」(Mappe VII/9/128)。「数週間後彼女をきわめて卑俗なやり方で僕の恋人にした（Ich [...] machte sie wenige Wochen später in der allgerwöhnlichsten Weise zu meiner Geliebten）」というのは、性的な意味で夫人を乱暴に自分の女にしたということであろう。神秘体験のさなかには「」の忘我状態にあつて、あのひとを所有するという考えほど遠くにある考えはなかった（Kein Gedanke war #mir damals# \

in dieser Welaufgelosheit | so fern, als jene Frau zu besitzen)」(Mappe VII/9/127) と言っていたにもかかわらず、アンダーはその〈所有なき愛〉をみずから裏切るのである。それが第三二章ではふたたび「ほどなく、彼女は名前をもたないエネルギー中枢に、彼の照明装置の地下に埋められたダイナモになりきった (Es dauerte nicht lange, da war sie ganz zum unpersönlichen Kraftzentrum, zum versunkenen Dynamo seiner Erleuchtungsanlage geworden)」(Lesetexte I/ 197) と言われ²⁹。ここでは、たしかに神秘体験の終わりとともに少佐夫人への愛も「突然の中断」を迎えはするが、「愛に生きるという大いなる営みは、本当は所有や「我がものであれ」という願望とはまったくなんの関係もないのだ ([...] das große Zulebe-leben eigentlich gar nichts mit Besitz und dem Wunsche Seinem zu tun habe)」(Lesetexte I/ 197) という、「彼の恋の病のほぼ頂点に位置していた」ときのウルリッヒの思いは覆されていない。それどころか、少佐夫人は「彼の照明装置の地下に埋められたダイナモ」となることによって、その後もウルリッヒに「啓示³²」を与えつづけるのである。

五 ムージルの「遙かな愛」(Fernliebe)

ウィルキンズが言うように、たしかに〈少佐夫人の物語〉は「反復と矛盾とで成り立っている」³¹。『特性のない男』第一卷第三二章を読んだだけではわからない謎に満ちている。第二卷第三二章で、少佐夫人を思わせるある女性への追憶が「山岳地帯での晩秋の日々」をウルリッヒに思い出させるのは、そこにウィルキンズの見いだした *9. A-Ag.*³⁴ すなわち *ss+9*³⁵ の記憶が混入したからであろう。しかしウィルキンズは、そのような矛盾と謎を指摘するに留まらない。*ss+9*³⁶ における夫人との出会いが「湯治場」であったことから、それをムージルがアンダースとおなじく「まだ二十歳になっ³⁷ていない」ときの体験と結びつけることによって、アンダースの〈少佐夫人の物語〉を「母―息子の近親相姦³⁸」

の物語として読もうとするのである。

ウィルキンズが手がかりとしたのは、一九二〇年頃のムージルの日記における「ヴェルター湖での夏の滞在」を回顧する記述であった。当時ムージルは「おそらくすでに十八歳か十九歳になっていた」が、母親と滞在していたヴェルター湖畔の「湯治場」フェルデンで、「母親が湖上の飛び板の上にしばし裸の姿でいるのを（……）偶然ちらりと見た。（……）彼女は「とても白く豊満な美しい体つき」で、（……）日記の書き手の記憶では、賛嘆はぞつとするような「衝撃（Erschöcken）」と混じり合っている⁽³⁶⁾。この「夏の滞在」とヴァレーリエ体験⁽³⁷⁾の「あの秋」が同じ一九〇一年の出来事であり、しかもヴァレーリエ体験の季節が夏か秋かについてのムージルの記述が曖昧なことから、ウィルキンズは強引にこの二つの「体験」を結び合わせ、少佐夫人の背後に——ヴァレーリエを介して——ムージルの母ヘルミーネを見ようとする。ウィルキンズによれば、そうすることによってはじめて、『特性のない男』の〈少佐夫人の物語〉の謎が解けるのだという。とりわけ、なぜウルリッヒと少佐夫人は性行為に至らないのか、という謎が。

散歩の途中にはげしい口づけを交わした二人のその後については、こう言われていた。「二人は驚き、さらに何度かお互いをつよく抱きしめたりしたもの、なにかがおかしいこと、そしてたとえ衣服や道徳というあらゆる障害から解放されたとしても、彼女の方もこれからは抱擁のさいに体を押しつけたりはしないだろうと二人同時に感じていた」⁽³⁹⁾。恋愛関係にある既婚婦人と若者との性行為を妨げるのは通常「衣服や道徳」なのであろう。じじつ、少佐夫人は「夫のことや年齢差のために（……）ひそかに自分を責める気持ち⁽⁴⁰⁾が鼓動し」（Lesetexte II 194）でもいる。しかし、そのような「道徳」から解放されてもなお、二人の肉体的接触を妨げるものがあるといわれるのである。ウィルキンズは言う。

障害になるものなどない——有刺鉄線も、女子修道院の壁も、ヘレースポントスもない——のだから、道徳以外の

なにかが彼らを引き離しているという言葉は、矛盾を内包しておりナンセンスであるように思われる。ウルリッヒは性的不能あるいは同性愛者なのではないかと推測したところで、この「袋小路」から抜け出せるわけではない。⁽⁴⁰⁾

まるで「有刺鉄線」や「女子修道院の壁」や「ヘレスポントス」(ダーダネルス海峡⁽⁴¹⁾)に隔てられなければ、あるいは男が「性的不能」か「同性愛者」でなければ、世の恋人たちは皆ただちに性行為をするはずだといわんばかりの口吻であるが、このような乱暴な論理でウィルキンズが主張したいのはむしろ、「障害になるものなどない」はずの二人が性行為に至らないのは、ウルリッヒと彼より「かなり年上」の少佐夫人はじつは隠された「母―息子」関係にあり、それゆえそこに近親相姦タブーがはたらいて二人は性行為ができないということである。こうした「近親相姦タブー」説はウィルキンズだけの主張ではなく、近年の研究にいたるまでまことしやかに語り継がれている⁽⁴²⁾が、はたしてそうなのだろうか。

はげしい口づけを交わした直後、二人は「途方に暮れてしまった」。なぜなら「その愛があまりに大きく並はずれたものだった」ので、それ以上どうしていいかわからなかったからだ。それ以前に、若きウルリッヒは「大いなる愛」という観念をいだいており、「真の恋の病は所有への欲求ではなく、そつと世界のヴェールがはがれることであり、そのためには恋人の所有が喜んで断念される」と考えていた。そのような詩的・形而上学的愛の観念をいだいている若者が、「衣服や道徳」といった障害もないのに性行為を求めないからといって、なにか不思議があるうか。それを「ナンセンス」というのは、あまりにも世俗の愛の観念に染まりすぎているのではないか。もしかしてウィルキンズは、ウルリッヒの少佐夫人体験が「遙かな愛 (Fernliebe)」と呼ばれているのを忘れてしまったのだろうか。それが彼女自身の引用した文章のなかで「初秋の日と同じくらいに肉体性のない、静止した、空気のように静かな、遙かな愛」と呼ばれてい

たことを。⁽⁴³⁾

いや、忘れていたわけではない。理解していなかったのである。ウィルキンズはその論文のなかで何度か「遙かな愛」という言葉を使っているが、その内実を検証した形跡はない。言葉だけの引用と近親相姦タブーとの関連でいわれる「ウルリッヒは若くして亡くなった「美しい母親」(「遙かな愛」)と幼少期の自分との古い写真を思い出し」という一節、そしてあることか「「遙かな愛」というエロティックな夢想⁽⁴⁴⁾」という言い方——これらはみな、ウィルキンズが「初秋の日と同じくらいに肉体的でない、静止した、空気のように静かな」といわれる「遙かな愛」の精神性を理解していなかったことを証している。⁽⁴⁵⁾

第四節の要素分析で比較した、二つの草稿と第三章とのちがいを振り返ってみよう。「④当時のA/Uの女性関係」では、草稿段階でも見られた「大いなる愛」の観念が第三章にいたって「所有なき愛」という、ムージルの「遙かな愛」の中核をなす観念にまで高められることに触れた。「⑤夫人との出来事」では、散歩の途中でのほげしい抱擁という、草稿段階での素朴な性愛行為にとまどいを覚えるウルリッヒと少佐夫人を通して、そこに「脱性愛」とでも呼ぶべき現象が第三章において現れるのを見た。つづく「⑥夜(夫人)」では、草稿段階でポルノグラフィーと見まがうような性的意味を内包していた官能シーンが第三章では完全に抜け落ちていることを指摘し、第三章を書く段階のムージルには「少佐夫人の物語」から濃密な性的要素を排除しようという「脱性愛」の意思がより明確に読み取れることを確認した。「⑦夜(A/U)」と「⑧夫人とA/Uの別れ」では、「ただ愛ゆえにこの愛の源の近くから一刻も早くできるだけ遠くへ行きたい」と願うウルリッヒの「遙かな愛」が、草稿段階での受動性から意思にもとづく能動的な行為へと転化していることを指摘し、それが愛する女性から遠ざかることによって精神的な愛を求めようとしたトルバドゥールの「遙かな愛」の精神的系譜に連なるものであることを述べた。そして「⑫神秘体験」では、精神的な「遙かな愛」

を神秘の調べにのせてうたうトルバドゥールの営みが異端カトリ派の「肉体的欲望」の排除と結びついて成立したように、ウルリッヒの島での神秘体験が、草稿段階の山岳地帯における神秘体験にはなかった、「肉体的欲望」の排除という言葉とともに成立することを確認し、さらには草稿段階に見られた「獣」や生々しい肉体の表象が消える代わりに、ウルリッヒの体験がついには宗教的な「愛の神秘主義」の位相でとらえられるのを見た。「¹³体験の終わり」では、神秘体験後のアンダース／ウルリッヒと夫人の関係を唯一詳細に語る¹⁴で、「きわめて卑俗なやり方で」夫人を恋人にしたアンダースに精神的な〈所有なき愛〉からの頹落を見る一方で、少佐夫人を「彼の照明装置の地下に埋められたダイナモ」にしたウルリッヒは、〈所有なき愛〉を最後まで捨てていないことを確認した。

この一連の流れから読み取ることができるのは、大きな枠としては〈遙かな愛〉と呼ばれるウルリッヒの精神的な愛が、草稿段階の夾雑物を削ぎ落とすことによって、『特性のない男』第三章ではその精神性を純化させているという事態である。草稿段階にはらまれていた肉体的性、官能シーンは排除され、第三章のウルリッヒと少佐夫人は抱擁にすらとまどいを隠さない。それだけではない。〈遙かな愛〉の精神性の純化とともに、〈遙かな愛〉によってもたらされる神秘体験も純化をとげ、ウルリッヒの神秘体験は「愛の神秘主義」と呼ばれる境地に到達するのである。このように、総じて〈脱性愛〉〈脱肉体〉と呼びうる流れにのって精神性の純化に向かう〈少佐夫人の物語〉に近親相姦タブーを読み取るのは正当な読み方だろうか。さらにいえば、〈少佐夫人の物語〉をモデルにより高い次元の愛の形を追求するウルリッヒとアガーテの兄妹愛の物語を近親相姦の物語として読むことに、はたして正当性はあるのだろうか。

第二巻第二二章で〈少佐夫人の物語〉を想起したウルリッヒは、自身のアガーテへの思いを意識してそれを「熾天使の愛 (seraphische Liebe)」になぞらえる。それは「相手のいない愛」とも「性のない愛 (Liebe ohne Geschlechtlichkeit)」とも言い換えられるが、この「熾天使の愛」はもはや性的にしか愛することができなくなった時代の人間に「社会的・

性的嫌悪の逆流から自由な愛」を教えるのだ……。そんな考えにとらわれたウルリッヒの前に、そのとき「けっして到達することのできない女性」の姿が「山岳地帯の晩秋の日々のように」浮かび上がってくる。

彼は眼前に青い遠景を見ていた。(……) 彼は自分の前を現実に行っている女性を完全に忘れ、いかなる欲望からも遠く離れて、もしかするとそのとき愛の近くにいたのかもしれない。(Lesetexte II/342)

現実には身近にいるアガーテを、このように「青い遠景 (die blauen Fernblicke)」のなかで〈遙かな恋人〉としての少佐夫人と結び合わせるウルリッヒの眼差しは、おそらく近親相姦とは別の位相でとらえねばならないだろう。本稿では、その手がかりのひとつをトルバドゥールの〈遙かな愛〉に求めた。十二世紀に忽然と現れ、それまでの西欧の愛の観念を破壊するにいたった〈遙かな愛〉の精神的系譜のなかにムージルの〈遙かな愛〉を位置づけることができれば、ウルリッヒとアガーテの兄妹愛はこれまでとは別の風景のなかに浮かび上がってくるにちがいない。本稿は、これから始められるそのような精神史研究のための基礎的準備作業である。

付記

使用したテキストは以下のとおりである。

KA = Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften. Mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften. Hrsg. von Walter Fanta, Klaus Amann u. Karl Corino. Klagenfurt 2009. Update 2015.

生前に刊行された『特性のない男』からの引用は「[esetexte I/ 193]」の形式で示した。この例では「第1巻／193ページ」を意味する。³³「³³n-1」と³³+9³⁴をはじめとする遺稿部からの引用は「[Mappe VII/9/122]」の形式で示した。ローマ数字以下の数字は「[Mappengruppe / Mappe / Pagina]」の順番に付し、この例では「ファイル群Ⅶ／ファイル番号9／122ページ」を意味する。

遺稿部からの引用に際しては、KA内で使われている記号をそのまま記している。記号とその意味は以下のとおり。

#…#＝削除

∧…∧＝挿入

「…」∧「…」＝移動（左から右へ）

註

- (1) Walter Fanta: Die Entstehungsgeschichte des „Mann ohne Eigenschaften“ von Robert Musil. Wien 2000, S. 194.
- (2) Eithne Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife': With an Unpublished Text. In: The Modern Language Review. Vol. 63, No. 1, January 1968. (邦訳「〈翻訳と解題〉エンニヤ・ウィルキンズ「ムージルの〈少佐夫人恋愛事件〉——未発表のテキストとともに」(一)」、白坂彩乃・大川勇訳、京都大学大学院人間・環境学研究所『社会システム研究』第二号、二〇一九年。なお、続編の(二)は『社会システム研究』第二三号に掲載の予定である。)
- (3) 大川勇「ある深層の物語の読解——ムージルの『特性のない男』研究のための序説」、京都大学大学院独文研究室『研究報告』第一号、一九八五年。
- (4) Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife', S. 80.

- (5) ebd., S. 75.
- (6) ebd., S. 75f.
- (7) ebd., S. 76.
- (8) ebd., S. 81.
- (9) Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife' におおづは „A-Ag“ とフンクトなしで表記されているが、本論文ではムージルの表記にしたがって „A-Ag“ とづら形で表記することとする。また、ウィルキンスは „s+u-“ および „s+g“ の „s“ を大文字で記しているが、フリゼー版全集（一九七八）以降は小文字で書くことが通例となっている。
- (10) Gesammelte Werke. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1978.
- (11) Gesamtausgabe. Hrsg. von Walter Fanta. Salzburg/ Wien 2016f.
- (12) Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife', S. 84.
- (13) Hermut Arnitzen: Musil-Kommentar zu dem Roman »Der Mann ohne Eigenschaften«. München 1982, S. 437.
- (14) Fanta: Die Entstehungsgeschichte, S. 194f.
- (15) Fanta: Die Entstehungsgeschichte, S. 195 446 Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife', S. 82 を参照。たとえは前者では waren となつてゐるものが後者では wären となつていたり、前者は abgereist となつてゐるものが後者では fort となつていたりする。
- (16) Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften. Mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften. Hrsg. von Walter Fanta, Klaus Amann u. Karl Corino. Klagenfurt 2009. Update 2015.
- (17) 本稿で訳しているのは „s+g“ のうちの〈少佐夫人の物語〉にかなする部分、すなわち „Mappe VII/9/124+129“ のみである。

- (18) 註17と同様の理由で、本稿では Lesetexte V/191-197のみを扱っている。
- (19) Karl Corino: Robert Musil. Eine Biographie. Reinbek bei Hamburg 2003, S. 158. (邦訳『ムージル伝記1』、早坂七緒・北島玲子・赤司英一郎・堀田真紀子・渡辺幸子訳、法政大学出版局、二〇〇九年、一六六頁。) コリーノは、そのときヴァレーリエの取り巻きの一人に陸軍大佐がいたことから、ムージルは彼女を少佐夫人に見立てたのであらうと推測している。
- (20) 『若き詩人への手紙』(一九〇三)、『マルテの手記』(一九一〇)、『ドゥイーノの悲歌』(一九二二)などに現れている、互いに孤独と自由を守るため恋の相手を所有するのを拒む、リルケの理想とする愛のあり方。『マルテの手記』で描かれる「愛する女」のように、リルケは愛の対象を超えていく愛を、すなわち「相手の愛の応答に左右される愛ではなく、愛によって相手を凌駕するような愛」を求めている。手塚富雄『ゲオルゲとリルケの研究』、岩波書店、一九六〇年、五二八頁。
- (21) 「南仏詩人(トルバドゥール)」天沢退二郎・新倉俊一訳、『フランス中世文学集I 信仰と愛と』所収、白水社、一九九〇年、四一二頁以下。
- (22) ドニ・ド・ルージュモン『愛について』、鈴木健郎・川村克己訳、岩波書店、一九五九年、一二九頁。
- (23) 『遙かなる恋』は独訳版では „Liebe aus der Ferne“ である。Denis de Rougemont: Die Liebe und das Abendland. Aus dem Französischen von Friedrich Scholz, Irène Kuhn. Guggenau 2007, S. 94.
- (24) ルージュモン、前掲書、一二八頁。
- (25) 同書、一二九頁。
- (26) 同書、一二二頁。
- (27) 同書、一一六頁。ルージュモンによれば、カタリ派にとって結婚制度とは「種としての人間の維持、家督権、男性の

獸性などを正当化した社会的秩序の中でつくり出された合法的不義 (jurata fornicatio)」であった。ドニ・ド・ルージュモン「愛」、笠原順路訳、『西洋思想大事典1』所収、平凡社、一九九〇年、五頁。

(28) ルージュモン、前掲書、一二四頁以下。

(29) Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife', S. 78.

(30) KA¹⁴ „zu der feinen Geliebten“ となっているが (Mappe VII/9/127) 〃は文脈から考えて、ウィルキンズの „zu der feinen Geliebten“ と〃〃読みが正しいと思われる。Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife', S. 83.

(31) Ekstatische Konfessionen gesammelt von Martin Buber. Mit einer Einleitung von Martin Buber »Ekstase und Bekenntnis«. Mit einem Nachwort herausgegeben von Paul Mendes-Flohr. Darmstadt 1985, S. 218. (邦訳『忘我の告白』、田口義弘訳、法政大学出版局、一九九四年、二四九頁)

(32) Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife', S. 79.

(33) ebd., S. 80.

(34) 本稿二頁を参照。

(35) Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife', S. 86.

(36) ebd., S. 88.

(37) 本稿第四節「③夫人の人物像」を参照。

(38) 現在では、ムージルのフェルデン滞在は一八九八年八月、ヴァレーリエ体験は一九〇〇年八月の出来事と見なされていて、両者が同年の出来事であるというウィルキンズの仮説の条件は満たされていない。Karl Corino: Robert Musil.

Eine Biographie, S. 187f. (邦訳『ムージル伝記3』、早坂七緒他訳、法政大学出版局、二〇一五年、(一四) 頁以下)

- (39) 本稿第四節「⑤夫人との出来事」を参照。
- (40) Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife', S. 78.
- (41) ヘレスポイントについては、ウィルキンズ論文の邦訳、訳註八を参照。
- (42) 一例として、Fanta: Die Entstehungsgeschichte, S. 196ff.
- (43) Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife', S. 76.
- (44) ebd., S. 90.
- (45) ebd., S. 87.
- (46) くわえて、意味不明の註もある。「遙かな愛」はほかの人びとの感情を考慮することを度外視することも多い。たとえば召使にたいするアンダースの態度は冷淡である」(ebd., S. 93.)。たと